



「ないものを描くために」 IMAGINING WHAT IS NOT YET

福岡女子大学 女性リーダーシップセンター
キックオフシンポジウム記録

2022/5/28(土)

於 福岡女子大学附属図書館／美術館



「ないものを描くために」

福岡女子大学 女性リーダーシップセンターキックオフシンポジウム記録

オープニング	...3
向井 剛 福岡女子大学 理事長・学長	
豊貞 佳奈子 福岡女子大学 女性リーダーシップセンター長・学長補佐・環境科学科 教授	
設立者代表挨拶	...7
城石 聖子 福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局 局長	
国内外女子大学長からのメッセージ	...8
佐々木 泰子 国立大学法人 お茶の水女子大学 学長	
高橋 裕子 津田塾大学 学長	
メアリー・シュミット・キャンベル スペルマン大学（米国）学長	
基調講演「自分起点で『ないものを描く』これからのリーダー」	...13
若宮 和男 起業家・アート思考キュレーター・福岡女子大学 客員教授	
ショートスピーチ	...20
田村 由美子 アジア開発銀行 駐日代表代行	
元村 有希子 毎日新聞論説副委員長・福岡女子大学 客員教授	
質疑応答	...27
オンライン参加者から寄せられた質問への回答を含む	
クロージング	...33
梶山 千里 福岡女子大学 最高顧問	
参加状況とアンケート回答	...34
シンポジウムフライヤー（日本語・英語）	...51

オープニング

向井 剛 福岡女子大学 理事長・学長

今日のご多忙の中お集まりいただきありがとうございます。2016年にこの構想が始まりまして丸5年、今日ここに、女性リーダーシップセンターの設置を記念するキックオフシンポジウムを開催する運びとなりました。100周年記念事業の一つである、本センターの設置にご支援、ご協力を頂きました学外理事の皆様、ご寄附をいただきました企業等、関係の皆様には、この場をお借りして御礼を申し上げます。また、この式典にご出席を賜り、激励のメッセージをお寄せいただく、お茶の水女子大学学長佐々木泰子学長先生、津田塾大学高橋裕子学長先生、スペルマン大学学長メアリー・キャンベル博士をはじめとして、ご登壇いただく方々に、篤くお礼を申し上げます。

新入生に、「福岡を代表する女性は？」と尋ねますと、ミーシャさん、浜崎あゆみさん、ちょっと古いところでは、松田聖子さんという名前が即答されてきます。しかし、上級生に聞きますと、歴史上の人物である、野村望東尼と伊藤野枝の名前が上がります。望東尼は、江戸末期、尊王攘夷運動を動かした女性であります。伊藤野枝は、明治期の女性解放運動の中心を担った女性でありました。上級生はさすがであります。本学の自校教育や歴史教育の賜物でしょうか。福岡の県民性で言いますと、立ち居振る舞いの品の良さ、高いセンス、根気強さ、まじめ、等々の資質が言われます。その中であって、この二人の歴史上の人物は、自らの信念に忠実であり、時代の先の先を読むうえで、際立ちあるお二人でした。自分起点で、遠くを見通す力を持った女性でありました。本学の前身である福岡県立女子専門学校は、こうした血を汲む福岡の市井の、市民の女性の声に応えて、創設されました。女性市民が学祖ともいえる、稀有な建学の物語を持っています。本シンポジウムのテーマである、「ないものを想像する」あるいは「ないものを描く」あるいは「ないものは創る」は、正に先人の尊い行動を端的に言い表し、かつ今に生きる我々の、将来に向けてあるべき姿をも表現しています。

以来、この100年の間に、女性の創造力を頼みとし、女性の躍進を望む声が高くなり、現在、多様性こそ時代を切りひらく鍵とされています。多様の中にも、女子教育に特化する福岡女子大学が果たす役割と期待には、今なお大きいものがあります。「権限や地位によらないリーダーシップ」、「行動の率先垂範」を標榜する本学から、次の時代に活力を与え、創造性に富み、豊かで包摂力のある社会を築く人材と知見、そしてそのムーブメントが生まれ出ることを信じています。

女性リーダーシップセンターは、アカデミアの世界と実社会とを結ぶ接点に位置づくといえましょう。地域社会、企業人、学生、教職員が、この場で分け隔てなく議論を交わし、研修を行い、新しい言葉を創り出し、新たなものの見方を生み出し、社会や組織に、文化的・技術的なイノベーションを引き起こすことが期待されています。本リーダーシップセンターに対する、皆さまの理解とご支援、そしてご参画をお願いいたします。手短ですが、開会の挨拶とさせていただきます。

豊貞 佳奈子 福岡女子大学 女性リーダーシップセンター長・学長補佐・環境科学科 教授

皆さまこんにちは。女性リーダーシップセンター、センター長の豊貞です。本日はこのように多くの方々にお越しいただきましたこと、とても嬉しく、有難く思っています。また 100 周年記念事業にご協力いただきました学内の役員の皆様、企業の皆様のお力添えで、本センターは設立することができました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

こちらの本学の附属図書館・美術館でこういったシンポジウムを開催するというのは、実は初めての試みとなっています。

ご覧いただけますでしょうか。このあたりに可愛らしい動物達とか、女性の彫刻など、多くの美術作品に囲まれたこの空間にお集まりいただきまして、今 1 階にいらっしゃいますけれども、中 2 階とか 2 階、それから奥のラーニングcommonsのお好きなところからご覧いただけるように、各所に大型モニターを設置しています。また、お越しになれない方にはウェビナー配信をしております、海外の方向けにウェビナーでは日英同時通訳を行っております。資料は、皆様には私の資料をお配りしておりますが、英語版についてはこれからチャットで英語版資料を配信しますので、ダウンロードして、英語でご視聴の方はご覧いただければと思っております。

「ないものを描く」。これが本センターのコンセプトです。この「ないものを描く」を掲げる本センターのキックオフシンポジウムで、何か新しいことがしたいということで、まずはこのような形、形態での開催となりました。本日は、各界で活躍されている女性トップリーダーの皆様にご登壇いただき、また、このないものを描くためのアート思考の専門家であらっしゃる若宮さんに基調講演をお願いしております。

先ほどの学長の話にもありましたように、約 100 年前に福岡の女性達が「女性にも高等教育が必要だ」との声を上げ、全国初の公立女子専門学校の前身を立ち上げたという気概を、我々は「福女大スピリット」と呼んでいます。そしてこの「ないものを描く」というのをセンターのコンセプトにさせていただいています。

リーダーシップを発揮するというのは、自分を発揮すること、それから他者と積極的に関わっていく、関わりながら自分色のリーダーシップを発揮する、そして社会を描いていくことだと考えています。女性リーダーシップセンターは、女性達が自分色のリーダーシップを発揮していくことをサポートしていきます。

立場や権限によらない全員発揮型のリーダーシップ観、これを軸に、自身のウェルビーイング（良い状態）であること、それから他者ウェルビーイング、そして社会のウェルビーイングへの志向性を培っていきます。

連日報道されていますが、世界中で苦しんでいる人が今この瞬間にもいます。日本の中にもコロナ禍、貧困等で苦しんでいる人がいます。そういった意味でも、社会のウェルビーイングというのは非常に重要であると考えています。

そしてこの女性達がそれぞれ自分色のリーダーシップを発揮していくことで、自ずと、いわゆるポジショナルリーダーとか女性管理職比率とか、そういったものの向上にも繋がっていくと考えております。

福岡女子大学は、来年、創立 100 周年をむかえます。今までの 100 年と、これからの 100 年というのは大きく異なっています。今のわたしたちは、先行きが不透明で不確実で、複雑な社会・時代を生きている、よって、「ないものを描く」のは、よりよい社会を作るために必要になると考えております。そして、ないものを描く力を養うための考え抜く姿勢、感性、アート思考を充実させたプログラムを作っていこうと考えています。

本センターでは、学生向けリーダーシップ開発、リカレント教育、女性研究者サポート、これを 3 本柱の取組としています。本日は学生向けリーダーシップ開発とリカレント教育についてご紹介いたします。

まず学生向けリーダーシップ開発については、共通教育に「リーダーシップ開発系」という科目群を今年設けました。これはリーダーシップ開発科目と体験学習科目で構成されています。他者を知り、関わるプロセスで自身を知り発揮していくプログラムになっています。専門科目において専門性の探求を、そして共通科目ではリーダーシップ開発のための自己の探求を促し、基本理念の「次代の女性リーダーを育成」につなげます。学生たちは 1 年次から 4 年次まで、共通教育と専門教育の両翼で学んでいきます。もう既にご覧になった方もいらっしゃるでしょうか、赤い鳥のポスターが各所に貼ってあります。これはこの両翼で学んでいくことを示していますので、後ほどご覧ください。

さらには、グローバルリーダー副専攻というプログラムを、この 100 周年を記念したフラッグシップ副専攻として立ち上げました。現在の 1 年生が受講してくれています。一般的な副専攻ではあらかじめ対象科目群が準備されていて学生はそれを履修していくという形をとりますが、このグローバルリーダー副専攻・GLP では、学生が自ら課題を発見・設定して、探求に必要な科目を自身で選び構成していくというプログラムになっています。最終的には何らかのプロジェクトの実施、リフレクションペーパー等の成果物の提出等を必修としています。また、留学も必修としており、他の副専攻にはないグローバルリーダープログラムとなっています。ここに示している GLP ゼミというのが、履修生が集う 1 年生から 3 年生までのいわゆるゼミというものです。この中で互いに協力しながら学びを深めるプログラムとなる予定です。

次に、リカレント教育。これは、女性が一生学び続ける、描き続けるために、3 つのプログラムを準備しております。1 つめが、家庭の事情でいったん仕事を離れた女性の再就職を支援する「女性のためのウエルカムバック支援プログラム」、それからもう 1 つが、チームでの学びを通したリーダーシップ発揮スタイルを習得する「イノベーション創出力を持った女性リーダー育成プログラム」です。実はこれは、本日もちょうどプログラムをやっているところです。そして、最上位に位置しているのが、「女性トップリーダー育成研修」。トップリーダーとして必要な志や感性の涵養とネットワーク・人脈構築を行います。今年度は若宮さんにお越しいただいて、アート思考のワークショップを行っていただく予定です。

最後になりますが、このような取り組みに関して、皆様のご支援をお願いしたいと考えています。現在、4つのスキームを検討中です。1つ目が、パートナー登録制度。学生等がキャリア相談をしたり社会課題についてアドバイスをいただけるような個人のご登録をいただきたいと考えています。2つ目の寄付講座は、これは企業・団体それから個人による寄付講座をお願いしたいと考えています。3つ目は、海外留学支援奨学金ですが、これについては100周年記念の募金の方で既に寄付いただいた皆様、本当にありがとうございます。今後も学生の海外留学を支援するこういった取り組みを継続していきます。最後の4つ目ですが、2024年度開講のグローバルリーダー実習、これは学生が自ら実習先を開拓するというプログラムで、学生受け入れのご協力をお願いしたいと考えております。今後、これらのお願いをさせていただくことになると思いますので、その際はどうぞご支援の方をよろしく願いいたします。

本学では「感性教育」に力を入れておりまして、この附属図書館だけでなく、本学全体に美術品を展示しております。現在、400点を超える美術作品を所蔵しておりまして、地域の方にご覧いただけるようになっていますので、ぜひお越しいただければと思います。

それでは、いよいよ「ないものを描く」ためにお寄せいただいたメッセージ紹介やご講演です。私も楽しみにしています。皆様も何を描けるのか考えながらお聞きいただき、最後の質疑応答で共有していただけると嬉しく思います。どうもありがとうございました。

設立者代表挨拶

城石 聖子 福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青少年育成局局长

今日はお招きいただきましてありがとうございます。本日、大曲昭恵副知事が参りまして皆様にご挨拶を差し上げるという予定でしたが、大曲副知事は今クロアチアにいらっしゃいます。急遽私が代わりにご挨拶を差し上げることをお許しください。

福岡女子大学が来年創立 100 周年の節目を迎えるにあたり「女性リーダーシップセンター」が設立されました。そして本日このように盛大に多くの方のご参加のもと、キックオフシンポジウムが開催されますことを、心からお慶び申し上げます。おめでとうございます。

これまでも、福岡女子大学では、国際性や主体性を重視した先進的な学生教育に積極的に取り組まれるとともに、企業・団体のリーダーを目指す女性を対象にした研修プログラムや、あるいは職場復帰・再就職を目指す方々を支援するプログラムを実施されるなど、女性高度人材育成機関として重要な役割を果たしてこられました。

今回設立されましたこの女性リーダーシップセンターは、福岡女子大学の基本理念である「次代の女性リーダーを育成」を具体化され、リーダーシップに関する教育研究及び社会貢献・実践を体系的に進められるとされております。

このセンター開設により、今後は、福岡女子大学の女性リーダー人材育成機関としての機能は更に高まることと存じますが、将来的には国内の女子大学トップのリーダー人材育成拠点となられることを目指していただきたいと思います。県では、昨年、福岡県の政策行政計画最上位の行政計画であります、福岡県総合計画を新たに策定をいたしました、今年度から 5 年間の計画でございます。この中で「ジェンダー平等の社会づくり」を重要な柱の一つとして掲げております。地域家庭社会活動における、ジェンダー平等な社会づくり、男女共同社会・男女共同参画社会の推進、働く場での女性の活躍推進、それから様々な方針決定過程における女性の参画推進などに向けた取り組みを行うこととしております。こうした取組は、誰一人取り残さない社会の実現を目指す SDGs の理念と軌を一にするものであり、世界に選ばれる福岡県となるよう、しっかりと取り組んでまいります。

結びに、この女性リーダーシップセンターで、これから始まる様々なアクションが、多くの女性のキャリア形成やリーダーシップの飛躍につながり、多くの実を結んでいくことに大いに期待をいたしますと共に、本日ここに御列席の皆様お一人お一人の御健勝と、御活躍を心からお祈り申し上げて、私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしく申し上げます。

国内外女子大学長からのメッセージ

佐々木 泰子 国立大学法人 お茶の水女子大学 学長

皆さまこんにちは。ただ今ご紹介をいただきましたお茶の水女子大学長の佐々木泰子でございます。福岡女子大学女性リーダーシップセンター設立、誠におめでとうございます。また本日はキックオフシンポジウムにお招きいただきありがとうございます。

今、私たちは気候変動、新型コロナウイルス感染症拡大などの様々な社会課題を解決し、持続可能で人々が幸せに暮らせる社会の実現に寄与することが求められています。そのために多様な知、中でも女性の力が欠かせないと言われています。

近年日本では、女性の活躍が様々な場面で進んでいるようにも思えますが、世界経済フォーラムが発表するジェンダーギャップ指数では 156 か国中 120 位、中でも政治や経済の分野での女性の進出が遅れています。スウェーデンやノルウェー、ニュージーランドなど女性首相の活躍を目にすることも多いですが、日本では女性首相はまだ誕生していませんし国会議員も女性はまだ少数です。管理職など意思決定を担う女性の割合はまだ少ないのが現状です。

その理由として、仕事と家庭生活のバランスをとるのが難しいことや男女の性別役割に関する根強いアンコンシャスバイアスなどが指摘されています。そのような時代において教育機関でジェンダーバイアスを持たず社会で活躍、中でもリーダーとして活躍することを目指す女性を育てることは大変重要であり、福岡女子大学の女性リーダーシップセンターの設立は誠に意義深いものと考えます。

さて、福岡女子大学とお茶の水女子大学は女子大学として、女性リーダー育成を使命としているという共通点があるのですが、それ以外にも三つのちょっとしたかわりと申しますか、ご縁があることをご紹介させていただきたいと思います。

皆さまは今、福岡市立美術館で「コレクションと展示のジェンダーバランスを問い直す」と題した常設展示が行われていることをご存知でしょうか。

この展示では女性の美術家による作品に注目し、彼女たちの作品を軸に展示が構成されています。展示を企画された正路佐和子学芸員の調査によれば、福岡市美術館の近現代美術コレクション 12,247 点のうち、女性作家による作品は 324 点しかなく、作家数でいえば 62 人だけ、一方男性の作家数は 907 人で、展示においても、過去のコレクション展を調査すると、女性の作家の作品が占める割合は全体の数パーセントから、多くても 15 パーセント前後だったとのこと。この数字に現われた非対称は、美術館の収集・展示活動が、基本的には

既存の美術史に基づき行なわれてきたこと、その底本としてきた美術史というものの自体が、教育を受け、美術家として活動を続けることが困難な状況に女性を置き続けてきた社会の価値観のもと編まれてきたことに起因すると正路さんは分析されています。そこで、美術館のこれまでの収集・展示活動や、戦後美術における女性作家の奮闘、女性作家の語られ方、そして美術作品と社会との関係についてなど、それぞれの章において美術史および美術館における女性作家にかかわる問題について整理をしながら、問いかけるかたちを取り、女性作家の作品を軸に展示内容を構成したと「キュレーターズノート」に書かれています。

現在も世界そして日本に、雇用機会をはじめとする男女の不平等が根強く存在している現実があります。美術館の収集・展示活動も無関係とは言えないということでしょう。歴史的な文化財を後世まで保存するだけでなく、社会に向けて発信していく責務を担う美術館からの美術界のジェンダー平等への素晴らしい問題提起ではないでしょうか。実はこの正路学芸員はお茶の水女子大学で修士課程を終えられて今は福岡市美術館でご活躍です。

他にも第13回福岡県市民教育賞を受賞された福岡女子大学国際文理学部環境科学科・和栗百恵准教授はお茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所・岡村利恵特任講師が学部時代にご指導を受けたというご縁もございます。岡村講師は現在お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所で女性リーダー育成を目指して研究・教育にご活躍中です。

そしてこれはかかわり、ご縁と言うには私事で恐縮ですが、私は山口県出身で福岡は関門海峡を隔てたお隣で、福岡を大変身近に感じて育ちました。

最後の例は、個人的な思いを追加させていただきましたが、このように様々なご縁があり、同じ女性リーダー育成を目指す女子大学同士として、今後情報交換や連携などをおして女性リーダーの育成に寄与することができたら大変光栄に存じます。

高橋 裕子 津田塾大学 学長

ご紹介ありがとうございます。津田塾大学学長の高橋裕子でございます。貴学が100周年を迎えられる前年の2022年に、女性リーダーシップセンターを設立されましたこと、誠におめでとうございます。

全国初の公立女子専門学校を前身とされる福岡女子大学の源流には、「ないものを描く」そして「立ち上がった」女性たちの果敢な行動があり、それを建学の精神として掲げられていること、すなわち福女大スピリットというものにとっても感銘を受けました。そしてそのような女性たちの行動は、私学的女子英学塾として始まった、津田塾大学の創立者、津田梅子の精神、私たちは「津田スピリット」とも呼んでおりますが、その「津田スピリット」とも通ずるものがございます。

男女共学が当たり前となって、日本の高等教育はジェンダー平等を達成したかのように思われる傾向があります。しかし、内実を見ても高等教育部にもまだまだ克服しなければならない、大きなジェンダーギャップがございます。例えば、4年制大学の学部の在籍者数も、今でも男性の方が上回っていますし、それが大学院の修士や博士と上がって行くにつれ、女性男性の差はさらに大きく広がっているのが現状です。それは教員についても同様です。助教、講師、准教授、教授、学部長、副学長、学長と職位が上がるにつれて、女性の割合は圧倒的に小さくなっています。そしてまた大学を支える職員についても上位の管理職に就いている女性はまだ圧倒的に少ないのが現状です。私たちは大学という場で、次世代に見せる風景を大きく変化させること、これをやっていかなければなりません。これは日本の喫緊の課題でもあります。私は福岡女子大学の女性割合を調べているわけではございませんけれども、全国の平均値を見ても、まだまだ厳しい現状です。

全国の公立大学の中で、女子大学はこの福岡と群馬にある2校だけと伺っております。まさに、女子大学としての存在意義が問われている昨今、このような高等教育界におけるジェンダーギャップの状況を女子大学からともに変革していくという気概が重要であると考えております。福岡女子大学が「女性リーダーシップセンター」を立ち上げ、さらにあらゆる分野への女性の参画の重要性を学生たちに示し、多様なロールモデルを見せていかれることを心から期待しております。そして貴学で得られた成果から、同じ女子大学として津田塾大学も大いに学ばせていただきたいと願っております。

「ないものを描く」、そして「立ち上がった」という2つのキーワードは、とても重要だと思っています。果敢な行動を展開した福岡の女性市民たちを模範として、今、目の前にある世界や日本の現状を、そして福岡の現状、学内の現状をも変革していけるようなインスピレーションとエネルギー、そして、何より確かな力量を培う場としてこの「女性リーダーシップセンター」は期待されています。同じ女子大学として、ともに頑張っていきましょうという思いを込めて、学生や教職員のみなさまの健闘、このセンターの健闘を心より祈念して、私の祝辞といたします。

最後に佐々木学長が少し縁についてお話されましたので、私も全く個人的な縁をひとつご紹介させていただきます。私の祖母が福岡出身でございまして、私の幼少期は祖母の力強い教育によってその基盤が築かれました。祖母は、本を読むことがとても重要であるということを、私に繰り返し教えてくれました。福岡のそういうスピリットが私にもつながっているように感じております。みなさま今日は誠におめでとうございます。

メアリー・シュミット・キャンベル スペルマン大学（米国）学長

福岡女子大学の向井学長、教員及び学生の皆様、そして友人の皆様に、ご挨拶申し上げます。私は、アメリカのジョージア州アトランタにあるスペルマン大学第 10 代学長のメアリー・シュミット・キャンベルです。

光栄にも、貴学の入学式にご招待いただき、祝辞を述べたのは、ほぼ 3 年前のことです。女性のリーダーシップの精神とパワーを称えるためにこの場に戻ってこられたことは私にとって大きな喜びです。スペルマン大学を代表し、また、グローバルな姉妹関係の精神をもって皆様の益々の成功を、海を越えた地よりお祝い申し上げます。

私は、2 度目の退職の準備をしている中、未来について思いを巡らせ、私たちの文化交流は今後も両大学を高め、強化していくと確信しています。女性がグローバルリーダーとなるための教育を続けるため、私たちは献身し、専心していかなければならないでしょう。

そして私がここスペルマン大学よりお伝えしたいのは、私たちは、臆することなく、このタスクに取り組んでいくということです。

新学年のスタートおめでとうございます。そして最後に皆様の健康と安全をお祈りいたします。いつまでも信念を貫いてください。

基調講演「自分起点で『ないものを描く』これからのリーダー」

若宮 和男 起業家・アート思考キュレーター・福岡女子大学 客員教授

皆様、こんにちは。若宮と申します。素晴らしいスピーチが続く中で、基調講演という機会をいただき、僭越ですが、アート思考を含めたリーダー像についてお話ができればと思います。

最初に自己紹介です。僕はもともと建築をしており、そのあとアートの研究をして、現在は自分自身も起業家をする傍ら、デライトベンチャーズというベンチャーキャピタルで起業家のメンターみたいなことをしたり、福岡女子大さんから客員教授、あと長野県立大さんでも客員准教授など、教育のことも関わらせていただいております。自分で授業を創るのはすごくやりがいがあり、次の世代に何を手渡していけるかということを考えています。

経営する会社は「ユニック」という会社で、いわゆる IT のベンチャーです。特徴のひとつが、女性がメインになって事業をつくるということ。もうひとつは、「全員複業」、つまり複業がルールの会社であること。僕自身も、代表・CEO ですが、複業をしないと会社にいられないので、色々な仕事をしています。ちょっと変わった会社なので、東洋経済の「すごいベンチャー100」に選んでいただいたり、働き方の賞をいただいています。メインでやっているのが、このキャップにもロゴが入っている、女性の起業家を創出するインキュベーション事業の「your」です。日本で女性が起業する折、男性に比べるとまだまだ不利な状況があります。事業アイデアを持った女性と、弊社のエンジニアやデザイナーと一緒に事業立ち上げを行い、立ち上げ後に分社化をして、独立独歩を踏み出していただくものです。現在、今年4月に1社分社化しまして、計2社、分社化しております。ネイルとかビューティー系の事業や、フェムテックと言われる分野で更年期をサポートするような事業などを行っています。

この会社「ユニック」では、企業のダイバーシティを増やすということをミッションにしています。3つのダイバーシティ、多様性です。多様性のひとつめは、事業の在り方自体の多様性です。20世紀型の資本主義は拡大成長路線で、大きい企業がいい、スタートアップでも「ユニコーン」や上場が成功であるような定義が存在すると思いますが、短期間で大きくならなくても長く残るような事業や新しい価値観を生むような事業の種類を増やしていこうということです。

2点目は、起業家の属性の多様性。グローバルで見ても、起業家・スタートアップ界隈の白人男性の比率はとても高く、日本ではだいたい5パーセントぐらいしか女性がいないような感じです。さきほどの佐々木学長のアートの話にもあったような「非対称性」があるので、当面、女性の起業家を増やしたいのです。さらには、女性に限らず、例えば障害のある方とか外国籍の方、あるいは小中学生みたいな、起業家の属性の多様性を増やしていきたいと思っています。

そのためにも、3点目の多様性「場所や時間に囚われない新しい働き方」を生んでいくことが大事だと思っています。子育てをしながら、学校に通いながら…色々な起業の形があるといい。それを、先ほどお話しした、全員複業という変わった働き方で実験しているという感じです。他には、これは大企業さんが多いのですが、僕自身が企業の中で新規事業の立ち上げをかなりやったので、資生堂、パナソニック、LVMH グループなど企業さんの外部メンターやアドバイザー、社内研修を依頼されることもございます。日経新聞の COMEMO という媒体でオピニオンリーダー、Voicy という音声のメディアでは、多様性、起業、アート思考のことなどを色々発信しています。

今日のテーマにもある「アート思考」に関しては本を2冊出しており、「ハウ・トゥー・アート・シンキング」は、間もなく台湾版も出ます。お読みくださった向井学長から、アート思考のことで教鞭をとってほしいとでメールをいただいたのが、今日のきっかけになっております。現代アーティストの皆さんとビジネスとアートの結び目を作るような活動もしています。

それではいよいよ今日のテーマである「ないものを描く」という話をしたいと思います。ここで、かんたんなクイズというか問題みたいなものをやってみましょう。お手元にペンと紙がある方。点を2つ打ち、その点 A・B を結んでいただく、というとても簡単な問題です。

まず1問目。点 A と B を結ぶ最も短い線を引いてください。ペンと紙がない方は頭の中で思い描いていただだけでも大丈夫です。少し時間を取ります。

とても簡単な問題だったと思います。幾何学的には、点 A と点 B の最短距離というのはこの間を直線で結んだ線になります。

次の問題です。点 A と点 B を結ぶ「最も長い線」を描いてください。どんな線になるのでしょうか。首をかしげた方もいらっしゃると思います。

種明かしをする前に、3問目です。点 A と点 B を結ぶ「最も美しい線」を描いてください。

これは色々な企業でもやっているのですが、迷いもせずにめちゃくちゃささと描く方と、時間いっぱいになっても「すみません、もう少し時間をください」と言う方と、二極化します。大企業でやると、フリーズした感じになっている人もいます。ではここから、回答というよりも、自分起点で「ない価値をつくる」もしくは福女大スピリッツある「ないものを描く」について、お話をしていきます。

VUCA の時代、アートのパラダイム、価値のパラダイム、そしてイノベーションの3つがキーワードです。

VUCAとはVolatility、Uncertainty、Complexity、Ambiguityの頭文字で、ざっくりまとめると「正解がない時代」、答えがよくわからない時代、と言われます。

先ほどの1問目の最も短い線は、正解があります。小学生の時に算数の問題で出てもおかしくないような問題です。

しかし、最も長い線や最も美しい線は、そもそも正解が存在しない問題です。こういったことをどうやって考えていくのでしょうか。学校教育の中で正解があるということに慣れきってしまっていると、大人になって会社に勤め始めても、正解があるはずだとフリーズしてしまうと思います。昭和とか20世紀は正解がある程度あった時代で、正解じゃないことをするのは不正解でした。不正解の不正という字をぎゅっと一文字にすると「歪（いびつ）」という字になります。僕の造語で、「不正解」ではなく「歪解」と呼んでいるのですが、いびつさというのは、様々な形、ユニークな形があるときに、どれか1つが正解とか、どれかが良いということではなく、それぞれが価値を持つという考え方です。「正しさよりもいびつさ」、とアート思考ではよく言います。

では、いびつさはどうやって見つけていくのか。基本的には、ここに今100人くらいの方がいらっちゃって、一人一人、それぞれ「いびつ」な、「違う」形をしています。自分の形はもともといびつなんですけど、この図のように片方が伸びて片方が引っ込んでいるみたいな、いろんな形があります。

一方、四角いのが、「社会性の殻」。これは僕の言葉では、「自分」ではなく「他分」。「他分」とは、「他の人が決めた分節」ですね。これはいびつな形というよりは四角い形をしていることが多いのです。例えば、「ママはママらしく」とか「こどもはこどもらしく」とか「部長は部長らしく」とか。それは本来、「自分らしさ」とは関係がないのに、社会が決めた文節の形に合わせてしまっているうちに自分本来のいびつさが見えなくなっている。それをアンカバーしていきましょうというのが、いびつさということです。女性活躍においても、エンパワーメントという言葉が使われますが、それに違和感があります。女性にわざわざパワーを与えるみたいなことをしなくてもパワーは持っていらっしゃる。ただ社会の枠組みの中でそれが覆われて（カバーされて）いるので、アンカバーしていけるといいですよって話をします。

2点目のキーワードは、アートのパラダイム。価値のパラダイムの変化ということです。左側にあるのが、20世紀型のパラダイムで、これは僕の言葉では「工場のパラダイム」と呼んでいるものです。工場というのは、基本的には同じものがたくさん作れるといいわけです。同じものが生まれると良い工場で、そこに違いが入ると不良品になる。違いは事故のもととなるので良いことではないとされていた。工場で生産するときにはなるべく規格化をして、部品を共通化して、その中で安定した再現性や品質の標準化を図ってきました。それが、世紀をまたぎ、価値の在り方が変わったと思っています。それがアートのパラダイムというものです。

背景には、物も情報も余りまくり、飽和してしまい、同じ物の価値が相対的に下がっていることがあります。これまでになかったような自分らしい作品を作れた時に、価値が高まる。誰かが既に作っているものと同じものを作ると、モノ

マネ・パクリとか言われむしろ価値が低い、もしくは悪いものになってしまう、これが「アートのパラダイム」です。価値のパラダイムが180度転換をしているのです。

これからはアートのパラダイムで色々な価値が作られていくべきだと思いますが、まだまだ工場のパラダイムの名残があります。学校では制服とかさすがにだんだん減ってきたのかもしれませんが、校則の問題や、あるいは就職活動になると女性は髪を束ね、リクルートスーツと黒いパンプスを買って、ベージュのコートを着て、みんな同じ姿で歩いています。工場のパラダイムの名残が残っているのです。工場のパラダイムのやり方で、新しい価値を作ろうとしている。齟齬が生じているタイミングだと思います。

「箱ティッシュよりアートを作ろう」と書きました。別に箱ティッシュが良くないということではありません。大企業で講演をした際に「自分の部屋にある箱ティッシュ何ですか？」と聞くと、だいたい15%ぐらいしか答えられません。「ネピアとかスコッティとかそこらへんだと思うんですけど」ブランド名もうろ覚えで、ましてや「メーカー名はわかりますか？」と聞くと、「ネピアってブランドじゃないですっけ？」というようにほとんど答えられない。

僕は長いこと新規事業やってきましたが、企業では「ニーズがあるものを作りなさい」って教えられるんです。でも、箱ティッシュって、皆さんご存じだと思うんですけど、ものすごいニーズがあります。もしこの中に箱ティッシュを使ったことがないという方がいたらぜひ名刺交換をさせていただきたいのですが（笑）、すごく需要があるけれどどれも良いものになってしまっていて、メーカー名とかブランド名を全く覚えてない。

これが、スマホについて聞くと、「iPhone10です」のようにブランド名だけでなく世代番号も出てくる。ましてやappleという企業名が出てこないことはない。何が違うのかというと、「代替不可能性」、つまり他と取り換えがきかないかどうかということです。

「ユニーク」がキーワードだと僕は言っています。ユニークって日本語だと「ちょっと変わった」とか「風変わりな」みたいなイメージがあるかもしれませんが語源的にはuniというのはラテン語、ユニコーンのユニは1（いち）という意味ですね。ユニークは、「ひとつぼい」ということです。他と取り換え可能ではないということ。ものすごく、誰とも交換可能ではないほど真面目なら、それも「ユニーク」なのです。

新規事業を長くやってくる中で、イノベーションや新しい価値という話をするとき、「新しさ」よりも「らしさ」と伝えていきます。デジタルワールド、ITの業界では、新しさはすぐコピーされます。どんなに新しいものを生み出しても、半年後にはその価値というのは、20%ぐらい落ちてしまいます。「新奇性」だけではすぐ陳腐化します。だから、コピーされたとしても、そのゾーンは自分だけが出せる価値、というのを創り出せる「らしさ」の方が大事と思っています。

もう1つ。アート思考のお話をすると、「つまり逆張りの発想ですね」と言われますが、逆張りで価値を作り続けてられるほど、世の中は甘くない。さきほど「いびつさ」の話をしましたが、「自分らしいこと」にものすごくストレートフォー

ド（まっすぐ）にいと、それは社会から見ると逆張りに見えるのです。究極の順張りなのです。ピーター・ドラッカーが10年前に、イノベーションは「真にユニークな出来事を起こすことである」と書いています。ユニークという言葉、そして、イノベーションというのは、前提となる可能性そのものを変えてしまうようなものなので、予測ができないとドラッカーは言っています。イノベーションは「技術革新」と日本語で訳されることが多いですが、技術の革新ではなく、価値の革新なのです。価値観自体を変えようとするのがイノベーションなのです。

右肩上がりって言い方をされたり、企業でも増収増益で決算をするとえらいとされるのが資本主義だと思いますが、拡大成長型の資本主義、大きな企業が偉いとか、時価総額が大きい、あるいは高い位置にいる人、上の方が偉いって価値観で並ぶと、上の方に大きい丸のような上場企業みたいなのであるわけです。しかし、実は、価値の軸というのはたくさんあるのです。今までの、拡大成長型の資本主義が悪だと言っているのではなくて、大きい企業とか大きい事業を創ることも、それはそれで1つ良いことでしょう。僕もデライトベンチャーズの方では、1000億円級の課題を解決する大きな事業もやっていたりしますが、それだけではないということです。

例えばSDGsとか、価値の軸を90度回転させます。そうすると、今まで大きな企業の中で並んでいたこのピンクの、隅っこにあった、ちっちゃいだけの事業に見えていたかもしれないものが、SDGsって新しい軸で考え直すと、ものすごくフェアウェイの先頭を走ってる企業かもしれない。価値の届け方によって新しい価値軸、測り方自体を生んでいくというのが、これからの時代だと思っております。

価値創出のために3つの思考という話をしています。アート思考というのは、アートと思考という相容れない言葉をつなげた不思議な単語です。もともと2000年前後のビジネス界で、ロジカル思考という言葉が使われるようになりました。マッキンゼーアンドカンパニーという戦略コンサルティングファームが編み出したもので、見えている課題を分解して、「ミーシー」とか「ミッシー」とも呼ばれるフレームワークを用いて漏れなく、だぶりなく、分解するというようなことが行われました。売り上げを、来店者数と単価に分けて、来店者数を性別・年代別みたいに分けて、分析をする、それがロジカル思考でした。これは、見えている課題に対しては極めてパワフルなツールですが、まだ見えていない課題を捉えることはできませんでした。

2010年あたりに、IDEOというクリエイティブカンパニーが「デザイン思考」を言い出しました。消費者の自宅まで行って一緒に生活をしながら、潜在的なニーズをつかみ出すというのがデザイン思考です。潜在的な課題も捉えることができるので、ユーザー・生活者が気づいてなかったものを引きずり出すことができます。とはいえ、ロジカル思考もデザイン思考も課題解決型の思考でした。「アート思考」は、そもそも課題解決の思考から始まらずに、自分起点というのがポイントです。偏愛、違和感、あるいは身体性みたいなことをヒントに「自分起点」を探っていくものです。

ちょっと分かりづらいと思うので、プレゼントをあげるなら、という例えをします。ロジカル思考は、例えば、うちは娘が2人いるんですけども、「小学5年生、女子、人気」とかで引くと、過去のデータから「一般的に見てこういうのが喜ばれます」と出てきます。これがロジカル思考的なアプローチです。デザイン思考的なアプローチというのはこれに対し

て、その人を観察するわけです。日頃道を歩いているときに「どこで立ち止まって何を手に取るかな」とか「SNSに何あげてるのかな」から、「多分、これ喜んでくれそう！」っていうのを挙げるのがデザイン思考アプローチです。それに対してアート思考のアプローチというのは、「この映画最高だから見て！」と、自分が本当に好きなものをあげるアプローチです。

なぜプレゼントに例えるかというと、事業であったり仕事であったりは、自分から社会に対して価値をプレゼントすることだからです。それに対しての「ありがとう」が、売り上げであったり利益であったりする。アート思考のアプローチは、自分が好きなものをあげるの、相手が「え、何？特に興味ないです。」とか言われることもあります。僕は起業家ですが、起業家というのは、投資家のところに行きますと、「そんなニーズあんの？」と、「バカじゃないの？」とか散々言われたりします。しかし、なぜこれがイノベーションのアプローチに近いかというと、相手がもともと期待していた物ではないものをプレゼントして、それに対しての熱量を持って、良さを伝えていくからです。たとえば自分が好きなバンドのCDをプレゼントして、最初は相手に興味をもってもらえなくても、「4曲目だけ聞いてくれる？」とアプローチしていくと、だんだん良さが分かってくる、あとから価値に気づくわけです。本当のイノベーションというのは、現状で価値を観察できないので、最初「は？」って言われます。「全然わかんない」と言われますが、徐々に社会が変わっていくという期待を越えたものをプレゼントできるというのが、アート思考だと思っています。

こういう話をすると、「これからはアート思考ですね、ロジカル思考とかデザイン思考とかは古いですよ」と言われたりするのですが、これは僕は全く間違っていると思っています。この3つの思考をうまく組み合わせて、時に切り替えながらやっていくことが大事だと思っています。この左側から、ロジカル思考、デザイン思考、アート思考ときて、アート思考、デザイン思考、ロジカル思考のように、振幅する、動的なものと考えています。

ロジカル思考というのは、皆がその考え方をすれば同じところに辿り着けるので、皆に見える世界です。デザイン思考は、共感性、感性が求められるので、一部の人だけに見えます。アート思考はひとりだけに見えるような世界です。

お茶や能で、「守破離」という言葉があります。守破離というのは、最初一般的な型を身に着け、それを破って、型を離れる、というもの。最後は自分らしい型を生み出していく、というのはアート思考の領域です。教育の現場では「型」が大事なことがあり、守破離はステップとして大事です。「離」からやればできるかということ、それはごく一部の天才だけで、自分らしさを見つけるためにも型を一度身に着けるのは大事なことで、ステップ1として「守」から入ります。ただ、教育の現場では「守」が神様だと思われ過ぎています。型を守ることが目的のように思われているのが間違えていると思います。初めに型を入れるのは、最後自分らしい型を見つけるためのステップ1でしかないということです。

このように、自分だけが見えている価値を見つけていくのが左側の三角形です。そして右側はその逆の形。それを届けていくときにも、アート思考、デザイン思考、ロジカル思考というプロセスがあります。例えると、ロジカル思考は

説明文みたいなもので、読めば理解に差がなくわかります。わかりやすいので、多くの人に理解されやすいのです。デザイン思考は、コピーライティングみたいなものです。ちゃんとした説明ではないものの、心をグッとつかむようなものです。それに対してアート思考は、詩みたいなもの。これらは言葉の使い方、モードが違うだけで、どれが偉いかどれだけで良いというのはありません。

ただ詩の言葉というのは、皆さんが「詩って分かんないよね」っておっしゃるように、共通言語になっていないような体験を語るものです。これを広く届けていくときには、むしろコピーライティング的になったり、説明的になる必要があります。

あるいは下の方に書いてあるように、事業を創るという観点でいうと、アート思考は、そもそも道具もないようなときに、DIY、「Do It Yourself」です。セルフで作って、デザイン思考だとプロトタイピング、ロジカル思考になると量産できて広くあまねく届く。これをモードを切り替えながらやっていくことが大事ということです。ただし、後半はアート思考は必要じゃないのかという、このような3次元的なイメージを持っています。要はアート思考というのは鉛筆の芯のように、その人自身が通っていること、その周りにデザイン思考、ロジカル思考を纏うイメージです。コアには自分起点がある。自分らしさや、自分の熱量というのが大事です。

今日のテーマである「ないものを描く」という意味では、「ないもの」は実はすでに皆さんの中にあるのです。それを「他分の殻」で閉ざしてしまっている。それをアンカバーして、鉛筆を研ぐように、あらためて「自分」に出会い直し、そこから新しい価値観、価値の軸が生まれていくというのがアート思考だと思います。芸術家は自分だけのアート作品、つまりアートワークを作りますが、「作品」は「ワーク」といいます。ワークには「仕事」という意味もあります。今まで日本で「仕事」と言うと、与えられたりこなしたりするものだと思いつてきたと思います。「自分らしい仕事」は、創り出すことができるのです。なので、芸術家が作品を作るように、仕事を作り出していましょうっていうのが、アート思考です。

最後にこの素晴らしいムービーを。これはスティーブ・ジョブズが低迷していたappleに戻って、1番最初に作った有名なCMで「think different」と言います。ジョブズが本当に素晴らしいと思うのは、あとで調べてもらいますと、CMに出ているのは経済的に成功した人ばかりではないのです。その中には、マーサー・グレアムという舞踏家の方だったり、セサミストリートのパペットを作った人だったり、ガンディーさんだったり、経済的に成功した人ばかりでなく、理想像にダイバーシティがあるのです。そこが素晴らしいと思う訳です。

「think different」、ちょっと言い換えて「think artistic」。世界には、価値の軸は多様にあります。皆さんの中にある軸が新しい軸になっていくという意味では、世界が、本当の皆さんが出てくるのを待っているという感じがしています。この場から、そして女性リーダーシップセンターから様々な価値観が生まれてくるといいなと思っています。短い、拙いスピーチでしたけれどもありがとうございました。

ショートスピーチ

田村 由美子 アジア開発銀行 駐日代表代行

みなさんこんにちは。今ご紹介いただきました、アジア開発銀行駐日代表代行的田村由美子と申します。

お話を始める前に少しか私の自己紹介をしたいと思います。私はちょうど 24 年前に、今勤務しておりますアジア開発銀行に入ったのですが、その前は 7 年ほど東京で経済分析とかカントリーリスクを調査研究する財団法人に勤めておりました。それはアジア開発銀行に入るための職歴をつけるという目的がありました。その後アジア開発銀行に応募し、2 年ほど待っていた時間がありました。ちょうどアジア通貨危機の時に、大きく影響を受けた国々の中にタイがあり、私は日本でもタイの研究、あるいは仕事をしておりましたので、ちょうどマッチして 1998 年の 4 月からアジア開発銀行で勤務することになりました。

アジア開発銀行では、主にインドシナ、あるいはメコン川流域の国々、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマーの 5 か国の ADB からの支援の計画を立てたり、経済政策の対話や提言を行ったりといった仕事を中心にしてきました。直近の 10 年以上は本部があるフィリピンのマニラを離れ、ベトナムに 7 年間、ミャンマーに 3 年半赴任し、現地に滞在しながらアジア開発銀行の支援を展開しておりました。その他には例えば私どものトップ、総裁（President）の補佐官を 3 年半ぐらいやったり、局長つきのサポートをし、予算・人事や担当地域の融資、あるいは贈与の全体の取りまとめをしながら 24 年間過ごしてきました。

ずっと日本を離れて仕事をしてきたのですが、今年の 4 月 1 日に東京事務所に転勤という内示があり、バタバタと移動しました。現在は前職の東アジア担当を兼務しながら東京で駐日代表の仕事をしております。それゆえ私の肩書には「代行」がついています。2 つの立場・仕事をかけもった状態で、年内はこの状態が続きます。今の仕事、つまり駐日代表の仕事については新入生のように 4 月 1 日からなので、今勉強中ということです。

このシンポジウムへの参加に向けた準備をする中で、1923 年に、先見の明そして女子教育の機会拡充という志をもった福岡の女性たちが全国で初の公立の女子専門学校である福岡県立女子専門学校を開校するというところで、大変尽力されて勇気ある行動を起こされたということを知りました。

本日私たちは、ここに集まり、福岡女子大学創立 100 周年を記念する女性リーダーシップセンターの設立をお祝いしています。このような機会にお招きいただいて大変うれしく思っています。日本で最も古い公立の女子高等教育機関、また現在はこれまでのスピーカーの方も言うてこられてように日本に 2 校しかない公立女子大学の 1 つである福岡女子大学に関わっておられるみなさんは、この大学の歴史、教員の方々、職員の方々、卒業生、在校生が地域と日本全体の社会経済発展に貢献してきたことを大きな誇りを持っておられると思います。

一方、残念ながら日本は女性のリーダーシップやエンパワーメントに関してあまり成績がよくありません。2021年のジェンダーギャップ指数では日本は156ヶ国中120位にランクされておりまして、これはG7の国で最も低い評価になっています。女性の高い潜在力と、様々な場所での多方面にわたる経験を活かす必要があるというのは明らかです。教育はそれを成功に導くための鍵であることは間違いなく、次代の女性リーダーを育成するという福岡女子大学の基本理念にははっきりと示されています。また、福岡女子大学の教育理念には次のように記されています。「福岡女子大学は次代や社会の変化に柔軟に対応できる豊かな知識と確かな判断力、しなやかな適応力を持ち、アジアや世界の視点に立って国内をもとより海外の国や地域においてより良い社会づくりに貢献できる人材を育成する」—私はこの方針に心からの共感と支持を表明したいと思います。

私の勤務するアジア開発銀行は、アジアの発展途上国を支援する国際開発金融機関で、ジェンダー平等に向けた取り組みを推進してきました。ジェンダー平等はアジア開発銀行の長期戦略である戦略2030に盛り込まれた7つの優先課題のひとつで、次のような5分野で構成されます。第一に女性の経済的エンパワーメント、第二に人間開発、特に保健・教育などに関わるジェンダー平等、第三に意思決定とリーダーシップにおけるジェンダー平等、第四に女性の可処分時間不足への対応です。これは、女性が様々な障害やconstraints（制限）、いろいろな作業、タスクに追われ自由に使える時間が大変少なくなっている状況を抜け出られるように支援することで、女性がもっと広い分野で活躍できるようにするものです。5番目に女性の外部ショック、例えば震災ですとか金融危機などへの耐久力を向上させる。このような目標達成のためにアジア開発銀行は2030年までに毎年締結されるプロジェクト（政府向け、民間向け、双方）の件数の少なくとも75%をジェンダー平等推進対策にすることによって決めています。これは、2017年度時点での実績65%や、2020年までに政府向けプロジェクトの50%をジェンダー目標推進対策とするといった従来目標に比べて、大きな前進を見せていると思います。

アジア開発銀行は対途上国業務の中でのジェンダー平等に加え、組織運営におけるジェンダー平等も推進しています。現在全職員に占める女性の比率は約60%。その中で国際選抜で採用される専門職員、私もこの中に入りますが、そこに占める女性の割合は38%で、局長クラスに占める女性の割合は29名中11名で約40%です。また、組織内ジェンダー平等のための17のアクションという方針が策定されており、2022年つまり今年中に専門職員に占める女性の割合を40%まで拡大するということを目指のひとつに挙げています。

アジア開発銀行は福岡女子大の取組を大変賞賛すべきと受けとめております。能力、知識、多方面での才能、先見の明を持った女性リーダーを育成し、彼女たちが日本、アジア、そして世界で未来の創生に貢献することを望んでいます。

今までお話したことに加え、ひとつ重要な視点を忘れないようにしたいと思います。それぞれが望む人生を歩み、圧力や偏見や差別などに左右されず、自身の選択と決定を行えるような機会は、ジェンダーやその他の個人的特性、文化人種、宗教のバックグラウンド、健康状態などに関わらず、全ての人に平等に与えられるべきです、そしてそれが所得や非所得の格差を縮める助けとなるはずで、多様性 diversity と、誰も取り残さない inclusion と

いう概念は、ジェンダーの問題も含むものと考えます。私たちは女性の問題で議論をやめてはなりません。女性やジェンダーの問題に焦点を当てることで、それと同じくらい重要な他の問題、例えば貧困層、不利な立場の人々、孤立や差別の対象の人たち、身体・精神に障害を持つ人々、社会的弱者などに関するいろいろな問題を軽視したり、排除したりすることがあっては意味がありません。またジェンダーの領域でも違った側面や多岐にわたる問題が含まれていることを認識する必要があるでしょう。例えばジェンダーの議論をする際に、子育ての問題がしばしば取り上げられますが、全ての女性が母親になるわけではありません。子育て中の女性は、同じ立場の男性との方がより理解をしあえることもあるでしょう。このようなことがジェンダー領域の中での様々な違った側面を表していると思います。

長年に渡り、様々な困難や障害や苦痛それから差別的待遇を受けてきた女性だからこそ、ジェンダーの問題からより普遍的な問題を意識できるのではないのでしょうか。女性は広い意味での社会的ネグレクト、孤立、差別などの問題にまず気づき、中立的で客観的な視点を持ち、建設的に対応できるはずです。開かれたコミュニケーションと参加型の意思決定の重要性を知っている私たちはそれらを効果的に促進していけるはずです。私はまた想像力 imagination と共感力 empathy のパワーを信じています。それは私たちが他者の立場で感じ考え、望ましくない状態を改善するための一歩を踏み出す助けになります。どんな小さな一歩でも世の中を変えることができます。もっとも脆弱な人々が快適に、自信と尊厳をもって生きられる社会は、その他すべての構成員に優しく生きやすい社会であると考えます。ですから、個人的特質や状況に影響されず、みなが輝ける社会を目指したいと思います。

ここ福岡女子大で教育を受け巣立っていく女性リーダーたちは、必ず私たちが持つ共通の目標を推進し達成するための先駆者になるであろう、ということは言うまでもありません。

それではどこから始めたらいいのでしょうか。本日のシンポジウムのテーマであり、この大学の創設者の方々が突き動かされたであろうと思われる、「ないものを描く」という命題が私たちに示唆を与えてくれると思います。ないものから何かを生み出し、新しいことを始めるときの困難や不安は女性だけのものではなく、全ての先駆者が感じることです。そんなときには期待と不安が入り混じった気持ちになるものです。それでも敷かれたレールの上を歩くのではなく、自分で道を切り拓くのは高揚感ややりがいを感じられるはずですよ。お手本はないけれど、私たちの imagination 想像力や creativity 創造力を縛る慣例もないからです。

このような考えは私たち一人一人が自身の人生や将来を形作るときにも応用できるような気がします。私たちはみな自分が成し遂げたい情熱や理想を持っているはずで、それが見つかるまで探し続けることはとても大切です。そのような夢や志を現実とするのは、言うは易し行は難しの典型です。私自身のこれまでの人生やキャリアを振り返ってみると、いつも心にとめていたことがひとつあります。それは何か新しいことや実現不可能に思えることに挑戦してみても失ったものは何一つないということです。

今日、参加されている学生さんたちや若い方に次の3つの提案をしたいと思います。第一に思考と行動を決して止めない、第二にステレオタイプな期待から自分を解放する、第三に自身の選択肢を増やすということです。もし私自身がしてきたことで有効だったものがあるとするなら、それはたぶん自分の問題意識について頑固に考え続けたことかもしれません。私は何がしたいのか、なぜそれをしたいのか、これまでに何がうまくいって何がうまくいかなかったか、その追及を続ける意思がまだあるのか、そしてそれならこれから何をすべきかなどということをいつも考えています。考えを巡らせると同時に行動も起こします。幸か不幸か、私は過去を踏襲しようとか周囲と横並びに行動した方がいいのではないかというような考えを持たないたちです。そして自分自身の信念や価値観に基づいて行動する強さを持ち合わせているのだと思います。こんな風だと、人生は割と楽に生きられます。そして何をするにもプランB、すなわち別の選択肢をポケットに忍ばせておくことで、私にとって妥協できないほど重要なことについて譲歩をすることなくここまで歩んでこられました。

結びに変えて女性リーダーシップセンターがこれから情熱、能力、オープンな精神を持った次世代の女性リーダーを数多く世に送り出されますように祈念して私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

元村 有希子 毎日新聞論説副委員長・福岡女子大学 客員教授

今日は女性リーダーシップセンターの発足ということで大変おめでとうございます。そして来年は創立 100 周年と同じでした。

私が勤めている毎日新聞は今年 2 月で 150 周年を迎えました。入社して 30 数年。当時、女性記者というのはまだまだ珍しい「パンダ」みたいな存在でしたが、ここ数年は新人記者の過半数が女性になっています。私がかかり寄り道をしてたどり着いたような視点や主張を、後輩たちはためらいもなく、まっすぐに記事にしてくれています。そんな後輩たちを眩しく見ながら、今日は自分の人生を振り返りつつ、「ないものを描く」ためのヒントを 3 つほどお話ししたいと思います。

まずは、「自分は自分である」という、シンプルな事実です。それ以上でも以下でもない。地球には約 80 億の人がいますが、私は 1 人しかいません。双子、一卵性双生児は同じゲノムを持っているじゃないか、なんて言う人もいますが、同じ遺伝子をもって生まれてきても、エピゲノムという現象で、違う人格、違う体質、違う人生を歩む別々の人間として育ちます。私は私であり、私の代わりはいないということを、忘れないでいてください。その「私」をきちんと保って正直に生きていけば、充実した悔いのない人生になると思います。

私は 35 歳の時に社会部から科学環境部というところに配属になりました。科学、環境、技術など、いわゆる理系の分野を取材する部署です。当時の常識では、科学環境部の記者というのは、大学で理工系学部を卒業、もしくは大学院まで行き、自ら科学記者になりたいと希望する人が 99%、という時代でした。なぜ私がそこに紛れ込んでしまったのかは、わかりません。実は私は高校時代、理科と数学が嫌いで文系に転向したという暗い過去を持っています。よりによってなんでそんな人を科学環境部にぶち込むんだと、最初は大変腰が引けましたし、恨みもしました。当然、お手本にできる人はいませんでした。超マイノリティという存在として、35 歳から第二の記者人生を始めたわけですが。一方で「私は私でしかないのだから、私ができる範囲のことをきちんとやって貢献しよう」と、ある意味、居直りのような、肝が据わった瞬間でした。わからないことはわからない、でもわからないなりにわかること、あるいは楽しい、面白いと思えることを記事にしていこうと思いました。科学者に会ったり、技術者に会ったり、やみくもに取材をしていく中で、色々な気づきがありました。

そんな気づきを同僚や先輩に言うと、「そんなこと考えたこともなかった」というような反応が返ってくるのです。つまり私にしかない見方が、いつの間にか自分の中に育っていったのだと思います。その問題意識を、仲間を巻き込んでキャンペーンにしていきました。幸いにも理系の研究者、そして社会の人々にも歓迎され、受けとめられました。

気がつけば私はもう 20 年間くらい「科学記者」という看板を背負って生きてきているわけです。マイノリティであることがいつのまにか強みになっていったと思います。研究者や科学コミュニティからは、『『社会から見た科学』を発信してくれる人』、そして社会からは、「科学的なことや、社会と科学とのつながりについてユニークな視点で語ってくれる

人」と見られるようになっていました。裏返せば、そのような役割を担う人が他にあまりいなかったということだと思います。そんな「付加価値」をいつの間にか身につけていました。これが 35 歳の転機です。「私は私」という気持ちをもちつづけていられたことが、結果的に今につながっています。

ふたつ目は「一人で頑張らなくてもいい」というメッセージです。自分は一人しかいませんから、自分でできることには限りがあります。しかも得意なこと不得意なことがありますし、不得意なことは他人に頼るしかありません。もともと記者の仕事というのは、誰かのところにお邪魔し、その人が成し得たことを報じていくという、「お邪魔虫」です。その意味で、他人に甘える、他人を上手に巻き込んでいく、自分の思いを伝えて他人を動かしていく—そうしたことは、人間ひとりでは生きていけないのと同じで、仕事をするうえでもとても大切なポイントではなかったかと、今振り返って思います。

エピソードとして 41 歳の時の経験をお話したいと思います。41 歳でイギリスに留学をしました。動機は、「仕事に疲れた」からでした。大変忙しくなり、色々な仕事が降ってきてアウトプットする一方、インプットする時間がない。電池切れのような状況になりまして、半ば逃亡する形で、アカデミアで言う「サバティカル休暇」を取りました。社費留学という、お給料をもらいながら勉強できる制度に、応募できる年齢ぎりぎりの 40 歳で手を上げ、選んでもらいました。1 年間、十分に充電をして帰ってきたら、「自分がいなければ回らない」と思っていた世界は全くそうではありませんでした。私がいなくても科学記事はちゃんと新聞に載っている、後輩たちが育てている。その時の愉快的な気持ちは、自分を楽にしてくれました。やりたいことで手が足りなければ人を巻き込む、逆もありです。その代わり、他人が困っていたら自分が協力する。そういう世界の中で、実現したいことをかなえるために、一緒に歩いていく仲間を作ろうという気持ちになりました。

50 歳を過ぎ、2 年連続でがんを患いました。その時は科学環境部長という管理職だったのですが、2 回目の手術がノーベル賞の発表タイミングと重なったのです。科学記者にとっては 1 年で 1, 2 を争う大切な行事なのに、手術の都合で入院しなければならなかったのです。それでも「私のことを守るのは自分しかいない」と考え、入院・手術を選択しました。私が本来やるべき業務、それから日本人がもし選ばれた場合に、追加で発生する業務を、事前に先輩や後輩に振り分けました。結果的に、日本人は選ばれなかったのですが、病室でノーベル賞のウェブサイトにつないで発表を見守り、おいしい差し入れを職場に送り届けるという私なりの貢献をしたつもりです。

3 つ目、最後のポイントです。「チャンスは外からやってくる」というのが私の信念です。「チャンスは自分で作るもの」という考え方の方もおられると思いますが、私は「外から降って湧く」ものだと思います。ただし、ここが大切ですが、「用意していない人の上にはチャンスはやってこない」とも思っています。

細菌学者のパスツールはこんな言葉を残しています。「幸運は用意された人の心にのみ宿る」、「偶然は準備のできていない人を助けない」。研究の世界では、こういったことを「セレンディピティ/serendipity」と呼んでいます。心

構えのある人、何か目標を持っていつもそのことを心のどこかで気にかけている人にとっては、偶然や幸運・悪運を含めて、すべてが必ず自分の経験につながる機会になるという意味です。

私は、本業として新聞記者、副業としてテレビのコメンテーターや執筆という社会的活動をしていますが、きっかけは43歳の時でした。留学から帰ってきてまもなく、「テレビに出ませんか」というお誘いをもらいました。「私は新聞記者であって、新聞話者じゃない」というこだわりはあったものの、好奇心が勝りました。生放送のニュース番組に出て、科学や社会のニュースにコメントするもので、やってみると、今まで苦労して得たスキルが、ドンピシャではまったのです。要領よくわかりやすくしゃべる、尺を守る、ポイントを外さない、といったようなことは、記者の仕事の延長で講演したり教壇に立ったりシンポジウムの司会をしたり、失敗もしながら体得したスキルでした。

そうして始めた社外での経験や付き合いを通して、自分の中に違う視点が生まれてきたことを実感します。それまでは科学のニュースとその周辺だけを見ていればいいという気持ちでしたが、世界は広い、とを改めて実感しました。さらに、社外での仕事で知り合った方からまた新しいチャレンジをいただき、それが自分を成長させてくれたと思っています。

目下、「論説副委員長」というポストを拝命しています。社説を毎日欠かさず適時適切に載せる。テーマや筆者を決め、品質管理も含めてマネジメントする役割です。科学のことしか知らなかった私が、ウクライナや外交、国会、参院選、知床の事故など、オールジャンルで学びながら働いています。自分の無知を痛感しますし、タフな仕事ではあるものの、日々の蓄積がきっと役に立つと思っています。大人げないように聞こえるかもしれませんが、私は「明日の自分は昨日や今日の自分より成長しているはずだ」と信じています。ですから、会社から去ったとしても、私は成長し続けますし、そんな私に周りの人たちは苦笑いながらも付き合ってくれるのではないかとと思っています。

大切なことは、若宮さんも田村さんもおっしゃっていましたが、自分らしさ…自分らしさというのはたぶん「自分」なのですが、自分を貫くこと、貫きながらも、その先に何か目指したい世界や目指したい状況を思い描いておくことだと思います。それができれば、周りもいつのまにか自分についてくる。楽観的過ぎるかもしれませんが、そういう気持ちで日々を過ごして行ってほしいと思います。好奇心とチャレンジが、何より大切です。

最後に宣伝になりますが、エッセイ集「科学のトリセツ」を出版しました。最新刊で、表紙は私の似顔絵です。双眼鏡で何かを覗いています。何事にも、好奇心を持って、社会を自分なりの文脈で読み取る、そうした気持ちを失わないでいていただきたいと思います。そこから「ないものを描く」パワーが出てくるのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

若宮氏への質問①

18年ほど前にリーダーシップの塾に通った時、「リーダーとは見えないものを見る。」、リーダーとしての素養として『lead the self』、まず自分自身を駆り立てることがリーダーシップの基本である」ということを学びました。本業は会社（メーカー）の経営者ですが、二代目として事業承継しました。起業家は自分のやりたいことで起業するわけですが、二代目は割と決まったテーマで起業します。自分というも「他分」（※）でほとんど決められている中からいかに自分を見つけていけるかが大事だと思いますが、見つけられる人となかなか見つけられない人とがいます。日本の社会はどちらかという「他分」な雰囲気が多いと思います。その中でビジネスリーダーを育てていくために自分自身を掘り下げていくことが大事ですが、その一方で、外からの刺激を受けることも大事だと思います。若宮先生のご経験の中からどういった刺激を受けることが自分のリーダーシップ、もしくは見えないものを見る、もしくはないものを作るために必要なことだと思われませんか。

※「他分」=自分で「自分」だと信じているものは、すでにみんなのルールやシステムによって切り分けられた「他分」であり、それに欺かれて本来の「自分」は隠されてしまっている。（若宮和男「How to Art thinking」より）

若宮氏からの回答

アート思想的には触発という言葉を使います。僕がなぜアートと触れる機会をもっと日本で増やしたいと思っているかと言うと、まさに特定の答えがないからです。作者が意図した答えをそのまま読み取るのではなく、アート作品というのはその人によっていろんな出会い方ができるので、みんなアートってよくわかんないっておっしゃる。わかんないからいいので、そういうものと触れると、ただ感化されるって言うのとは違って、なんかよくわかんない気持ちが自分の中に埋め込まれる。

新しい価値観って自分自身も咀嚼できないものだったりするので、5年後とか10年後になって、「あーこれか！」みたいなことが起こる。そういうよくわからないものと触れるってということですかね。

逆に言うとあまり理解できるものとばかり触れていると、それって何で理解できるかと言うと、今の価値観、基本の価値観で処理できるものだからなので、なるべくわからないものと触れるってことだと思います。

また、事業承継や企業での新規事業の場合に一つ注意点があり、それは「自分」のとり方です。個人としての「自分」を起点に起業するのと異なり、企業の場合には企業の「自分」らしさが重要になります。せっかくこれまでに積み重ねてきた御社のいびつさがあるのでそれを活用しない手はない。企業の「自分」のいびつさをさがし、そこに個人の「自分」らしさも掛け算できると、「新結合」がおこりイノベーションが生まれるという視点も大事にいただけたらなおワクワクする未来が起こってくると思います。

若宮氏への質問②

今大学3年生ということもあって、就活生をやっている色々な会社と自分を知っていく中、会社に入れば何となく安泰だなみたいに思っていたイメージが打ち砕かれているところです。また就活サイトなんかを見てみると、デザイン思考テストっていうものがすごく流行っていて広告で沢山でてきています。それが流行りなんだなあと思いつつ、プラスアルファでアートな思考を持っていることが組織の中に入っても歯車にならないために大事なのかなと理解しました。若宮様がご自身の経験として外からの枠組みをアンカバーした体験であるとか、ご自分らしくいようとした瞬間、またそれができた瞬間があれば是非エピソードなどを教えていただけたら嬉しいです。

若宮氏からの回答

起業家としてやっていると僕も起業して1~2年目ぐらいの時にはいわゆる上場を目指すレースに乗りかけたことがあるんですよ。投資家のところを回って、投資を受けるために5年で上場しますみたいなことを書いたりとか。僕のまわりは起業家が多かったので、3億円調達しましたとか上場しましたみたいにSNSにがんがん上がるんです。そうするとそうならなきゃいけないだと、「起業家らしく」という「他分」に囚われてしまって。

そういうことをやっているうちに、投資家の人は既存のやり方のほうが効率がいいので複業をやめなさいとか、女性のフェムテック（女性が抱える健康課題をテクノロジーで解決する商品やサービス）とかやっているスケールしない（拡大しない）とか言われて。自分も信じてない嘘の上場ストーリーを描いてやっていたら起業した意味あんのかなあ、っていう思いが沸き立ってきて。途中から新しい起業というか起業の多様性みたいなのを改めて考えるようになりました。

それと、2年くらい前にイベントなどの登壇についてジェンダーバランスがとれていないイベントには登壇しないっていう宣言をしたんですね。これも僕自身の「いびつさ」を起点にしていて、それは「違和感」がヒントになっています。実は僕はすごい女系家族なんです。4人きょうだいで女3人男1人で育て、うちも今娘2人なんです。女性の可能性なんて別に言われなくてもずっとそばにあったから信じていて、でもスタートアップのイベントとかっておじさんばかりなんです。自分が登壇者として呼ばれると嬉しいので最初のうちハイハイって行ってましたが、自分がそこに出ちゃるとそれは自分もそれに加担して女性を席を1個奪っていることにあるとき気がついて、「登壇者の中で女性比率が30%を超えてないお仕事はお受けできません」という宣言をした。僕にとってはすごく普通のことだったんですけど、かなり反響をいただいて色々なメディアから取材を受けました。

そんな大きなことじゃなくていいと思うんです。何かちょっと、自分にとっては違和感なこと。他の男性はあんまり違和感を持たないかもしれないけど、女性が新規事業や起業家に少ないっていうのは僕には強烈な違和感。で、ちょっとだけアクションしてみるっていうことがありました。という事例って、答えになっていますでしょうか。

質問者からの応答

特別なことじゃなくても自分のバックグラウンドから出てきた考えを素直に持つていこうと思います。励まされました。ありがとうございます。

元村氏への質問

「チャンスは向こうから降って来る」といったようなフレーズが非常に心に響きました。私の部下のこれからの将来のチャンスの掴み方とわたし自身の今後の組織の中、社会の中での進み具合と照らし合わせてみました。ご自身のご経験は、おそらくご自身がやっておられたご準備とはまたちょっと違う展開でいらっしまったのではないかと思うのですが、そのご準備がどういう形でそういう展開につながったのか、あるいはそのご準備というのは、どこまで自己アピールと
 いうか、自己主張をなさっていらっしまったのか。自分で掴むのではないというお話と、自分の準備の外への出し具合みたいなものについて、何か心がけていらっしまったようなことがあったらお聞かせいただけますでしょうか。

元村氏からの回答

私も昭和生まれで、九州育ちですから、「女は一步下がって」という教育を受けてきたと思いますが、「違うな」と感じたことはちょっと一言言わずにいられないタイプです。ただ、その場の雰囲気を読んでしまうという臆病な部分もあわせ持っています。

そんな中で、「毎日新聞」という会社は、比較的、年齢とかキャリアに関係なく、主張を聞いてもらえる居心地のいい場です。自分はこうしたい、これはおかしい、これは許せないというようなこともためらわず口に出し、アサーティブに振る舞うことができた。この会社に所属してよかったなと思うところです。

一方で、「給料分の仕事は笑顔でこなそう」と決めていましたから、好き嫌いで仕事を断ったはほとんどありません。ニコニコして働いていれば、周りがいろんな仕事を振ってくる。自分が考える自分の能力の上限より3%くらい上、ちょっと無理しなきゃいけないレベルの仕事だったりします。でもちょっと頑張っってクリアすることで、次の日の私は少し成長している。自分にとってはそんな、嬉しいスパイラルに乗れたんじゃないかなと思っています。

もちろん「本を書きませんか」とか、「講演をお願いします」とか、「テレビに出ませんか」というような提案も、会社によっては全部ダメってところもあります。私がたまたま入社したこの会社は、自分の責任においてやるならいいんじゃないという風土で、有難いことに、チャンスを逃さずに生きてこられたのかもしれない。

田村氏への質問

3つのアドバイス（※）の中で思考と行動を止めないというアドバイスをいただきました。私も今年から少し環境が変わって、思ってることは浮かんでくるけどすぐ沈んでまた浮かんで沈みということで、思考しては止まってる繰り返して、今はちょっと悩んでいるところなんです。田村さんが、具体的に思考と行動を止めないために例えばメモするであったりとか人と話すであったりとか、何か工夫をされていることがあれば是非教えていただきたいです。

※ 3つのアドバイス = ①思考と行動を決して止めない、②ステレオタイプな期待から自分を解放する、③自身の選択肢を増やす

田村氏からの回答

その気持ちはよく分かります。私も考えと行動を止めないと言っておきながら止まってしまうことも多い。私が有効と思う方法の一つは言語化すること。やはり書いてみることはいいと思います。書くことによって思考のプロセスが本当にロジカルであるかどうかというのが見えてくる気がします。

若宮さんのお話の中で、今時は解がない方がいいと言うような見解があり、それに励まされもしましたが、解がないという状況も含めて一つまとまった考えを持つには、書くということがいいかなと思います。例えば、1ページの図式やマトリックスのような形で書いてみると自分の考えがよくわかるし、可視化できるような感じがします。

それから、私はどちらかというと、自分が考えている目的や問題意識について、直接的に誰かに相談したり話したりというよりも、アンテナを高くて自分が考えている事に触れるような、或いは関係があるようなことをなるべくキャッチできるようにするほうが、考えをまとめられる、或いは行動を起こすきっかけを作ってくれるような気がします。

高橋氏への質問

共学でのリーダーシップ教育と女子大学でのリーダーシップ教育の違いを教えてください。

高橋氏からの回答

それは正に、なぜ女子大学が存在しなくてはならないのかということに直結すると思います。基調講演をなさった若宮先生は、女性には内に秘めたカラーがすごくあるという事を仰ってくださいました。しかし、そのパワーに気づけなかったり、それを発揮したりできる状況にない女性がすごく多いわけです。

私たちが見ている風景は、やっぱり圧倒的に男性中心に回っているんです。テレビを見ても、新聞を読んでも、それから国会中継を見ても、報道番組を見ても、男性が常に主の役割をしていて女性はサブの役割をしているわけです。女子大学はそれとは異なる風景を、女子学生に常に日常生活で見せている事が重要だと思います。今日のようなイベントの日だけではなく、毎日過ごしている時間に女性が常に中心に置かれ、女性にアテンションが注がれ、女性にフォーカスされた様々な授業が行われ、様々なイベント等も組まれている。そういう体験というのは社会に出たら二度と来ないのではないかと思います。

であるからこそ、人生のギアを入れる時期、大学生の時にどんなシャワーを浴びて育つか。その特別なシャワーを提供できるのが女子大学だと思います。別に女子大学と共学大学、どちらが優れている、優れていないということではなくて、自分にフィットする大学に行くことが非常に重要だと思います。女性には力がありますよ、ということを感じさせてくれる、そういうことに集中した教育空間というものの価値が、とりわけ日本のようなあまりにもジェンダーギャップが著しい社会においては、非常に重要な役割を果たすのだと思います。

大学の風景といった意味では、福岡女子大学様ではまだ女性の学長を誕生させていらっしゃらない。そうだとしたら、これは重大な事件ですよ。特に、女性、学生にとって。これは、大学自体が自らを変革していかなくてはならないという事件です。なぜ女子大学でこういうことになっているのか。男性の学部長の写真は拝見いたしましたけれども、学部長、理事や局長に女性が出ていなかったら、それはなぜか。

女子大学は女性が中心に据えられる事をエンカレッジしていく、そういう空間であるということに、特別な意味がございます。これは女子学生の方の質問かもしれません。実は私の最初のスピーチでは、日本の共学大学ではなかなかできていないことを女子大学から率先して実現し、発信していきましょうという意味合いを含めておりました。だから外を変えるだけでなく、自分達の立っている中、つまり学内もどうなっているのか、しっかり見て行く必要がありますね、ということでございます。

ちょっと問題ある発言をしてしまったかもしれません。しかし福岡女子大学の役員のお姿を拝見すると、すべて男性が並んでいて、こういう指摘をする人もいないと思うんですね。ご質問ありがとうございました。

オンライン参加者から寄せられた質問への回答

時間の関係上取り上げられなかった質問に、後日登壇者がお答えくださいました

田村氏への質問

可処分的時間不足を解消する具体的な方策のお考えがあれば聞かせてください。

田村氏からの回答

私が本日取り上げたのは女性の可処分的時間不足を解消することの重要性でしたので、具体的方策の例についても女性に焦点を絞って回答します。

女性は家事労働に取られる時間が多く、特に発展途上国においてはそれが顕著です。方策の一つの例は、生活インフラの整備です。自宅近くに水道や共同井戸を設置する、電気を引く、道路を新設したり質を改善したりする、というようなハードインフラの整備により、家事労働に費やす時間が劇的に減少することがよくあります。

二つ目の例は、ソフト面での改善です。教育の機会を増やす、保健衛生のアクセスや質を上げる、農業の生産性を高める、などの努力により、女性の経済的自立や知識・スキルの向上が可能となり、直接・間接に可処分的時間不足の解消を助けます。更に、若宮さんが話されたような起業（スタートアップやインキュベーション）サポートや金融機関のサービス、特に女性が関わるマイクロビジネス、マイクロファイナンスなど小規模の雇用・所得創生を支援することで、女性の社会や労働市場への参加を促し、結果的に可処分的時間が増えることもあります。

若宮氏への質問

価値観軸（アート思考）を入れれば、平均を重視する統計学では無視される少数派や外れ値を活用できるかもしれません。憲法でその保障を目指している人権を使えば正しい少数が間違った多数に勝てるかもしれません。私は価値観の転換は世代が変わるときに必ず起こると思います。このことからマイノリティの価値を理解してもらおうべき世代は今の世代のマジョリティ（大人）ではなくこれからの世代（子供）へ伝えることだと思います。マイノリティのマジョリティ化は自主的に起こせるものなのでしょうか？

上の質問とは別の質問なのですが、私の大学の講義で紹介された質問です。男女の友情は成立しますか？

若宮氏からの回答

なかなか難しい質問ですね。僕もダイバーシティやジェンダーのことで行政や企業で話す機会もいただくのですが、その時にやっぱり難しいのが、「当事者」ということです。おっしゃっていただいているようにマジョリティってやっぱり社会課題の「当事者」化が難しいところがある。なぜかという、社会はマジョリティや現在の社会構造における強者に最適化してつくられていて、困ることが相対的に少ないので、マジョリティの人は偏りや問題に気づきづらかったり、自分ごと化しづらいという構造がある。選択的夫婦別姓や同性婚が進まないのもそうですね。

これを変えるには一つはマジョリティがマイノリティ的な価値観にきづくこと。アート思考が浸透すればこうしたバイアスや固定的な価値観の「コリ」がほぐれ、多数派や常識ではなくいびつさや異質性の価値への感性があがり「マイノリティの声に耳が開く」ということがまず起こります。あるいは、マジョリティの立場にある人が、環境をかえマイノリティになってみる（たとえば大企業の部長クラスが福祉のコミュニティに飛び込むなど）という方法もありますね。

もう一つはマイノリティがマジョリティに共鳴者を見つけること。たとえば僕は「おじさん」ではありますが女性の可能性を信じています。このようにマジョリティ属性にあってもマイノリティへの共感・共鳴する人はいます。属性のちがいで対立せず、こうした共鳴者を見つけるのが大事で、そのためには共鳴を引き起こすような発信も大事ですね。

こうした同世代への働きかけもした上で、偏見の少ない「ネイティブ」にアクセスするのはとても有効だと思います。ただ、同世代がボトルネックになると次世代が抑圧に悩むこともあるので、大人世代は大人世代でかえていこう、というのが僕のスタンスです。

「男女の友情」に関しては原理的可能性としてはもちろん成り立つのではないのでしょうか。そして、それは、男男でも女女でもそうですし、恋愛対象になる可能性も含め、どちらもあると思います。ただ気をつけなければいけないのは、これを性加害や性消費にすり替えられることです。「男女の友情」をあえていう場合、性欲を前提とした議論だとすると、ただしく性の知識をもつことがいづれにしても不足しているし、しっかり教育にも取り入れていく必要があると思います。

クロージング

梶山 千里 福岡女子大学 最高顧問

みなさん、どうもありがとうございました。お話し頂いたことは、私どもとしてはすごく参考になります。

皆さんの話をまとめると、物凄くシンプルです。ベクトルが色々あって、話の内容は、エネルギーが最低になる話ですよ。ベクトルが色々な方向に向くほどエネルギーは安定します。逆に一つの考えを何人もが持つという方が難しいのです。個人は個人。皆違う考えを持ちなさい、という話であったと理解しています。

その内容は、当たり前と言えば当たり前ですが、いい話を頂いたと思います。話を提供された方には、感謝いたします。

福女大は、教育は立派にやってきたけれど研究が少なく、深くありません。研究を深く広げるために女性リーダーシップセンターと、国際フードスタディセンターを創ろうという発想でした。福女大は、教育は一生懸命やっているけれど研究がまだまだなので、皆さん方のお力を借りないとやっていけないと思います。

今日は本当にいろんなご意見を頂いて、大学としてはこれから色々な改善に使わせて頂きたいと思います。是非、皆さん方のアイデアやご助言をこれから先も頂きたいと思います。

福岡女子大学は、「教育」は物凄く高いところまで行っていると思います。敢えて言うと入学試験の点数は、九州では九州大学の次が福岡女子大学なのです。それから「国際」活動で言えば圧倒的に福岡女子大学は深く広く行っています。しかし日本全体で正しく評価されているかといえばそうではありません。そのためには、中央と地方の評価の格差も10年くらいかけて直していかなければいけないと思います。多くの手助けを借りながら、社会的に正しい評価を受ければ、福女大の研究は段々良くなると思います。

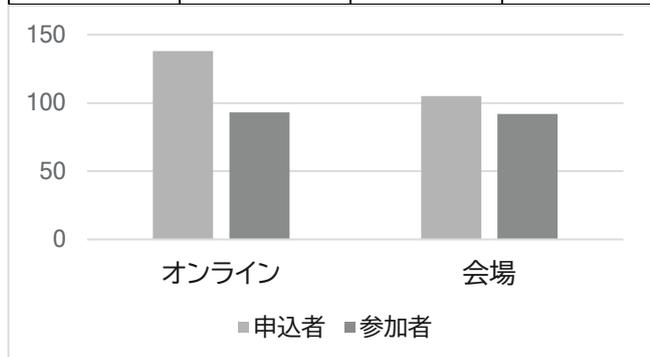
東京オリンピックの時に、女性が少ないと言ったら、ある大臣が、委員会に10名女性を入れればいいじゃないかと言ったけれど、そんな馬鹿なことを言うてはだめです。素人を何人集めても何の意味もないのです。私どもは玄人の研究内容を持った女性を人材育成するということで、今後頑張りたいと思います。

是非皆さん方のご支援を、今以上にお願ひしたいと思います。どうもありがとうございました。

参加状況とアンケート回答

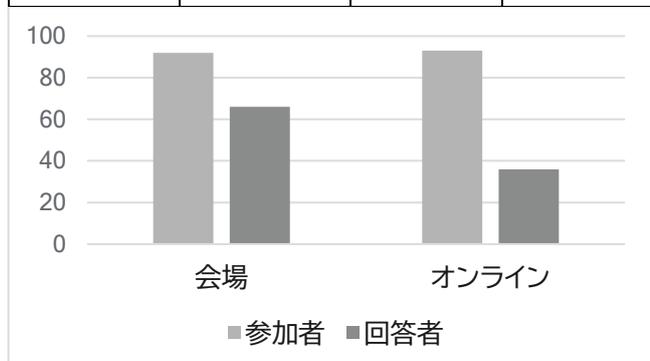
1. 参加率

	申込者	参加者	割合
オンライン	138	93	67.4%
会場	105	92	87.6%
合計	243	185	76.1%

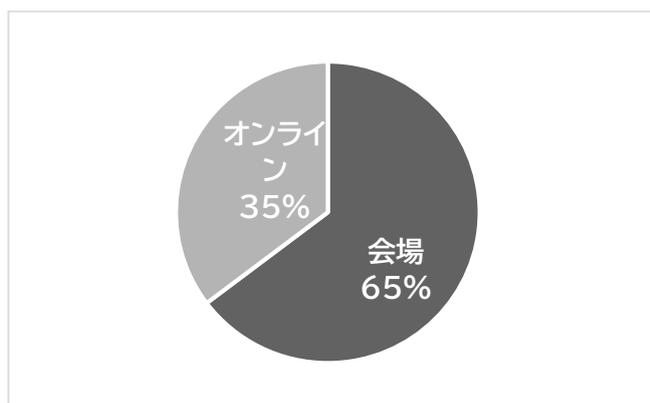


2. アンケート回答率

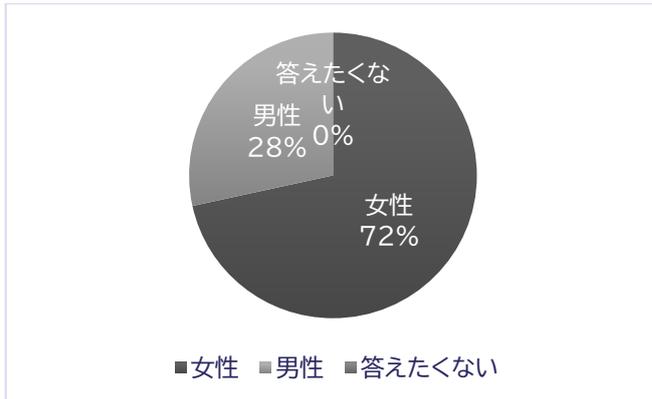
	参加者	回答者	割合
会場	92	66	71.7%
オンライン	93	36	38.7%
合計	185	102	55.1%



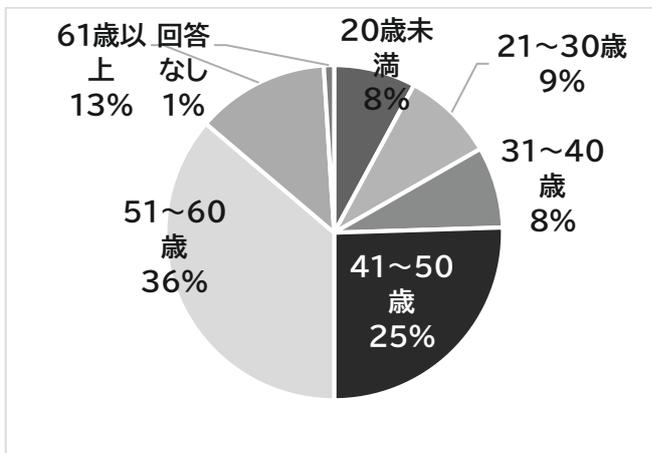
3. 参加形態



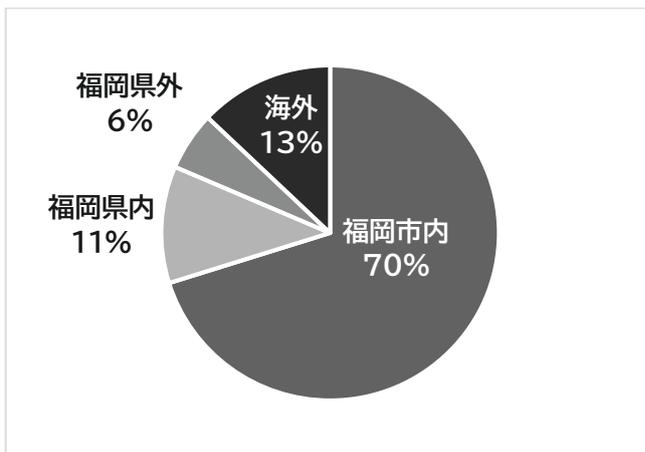
4. ジェンダー



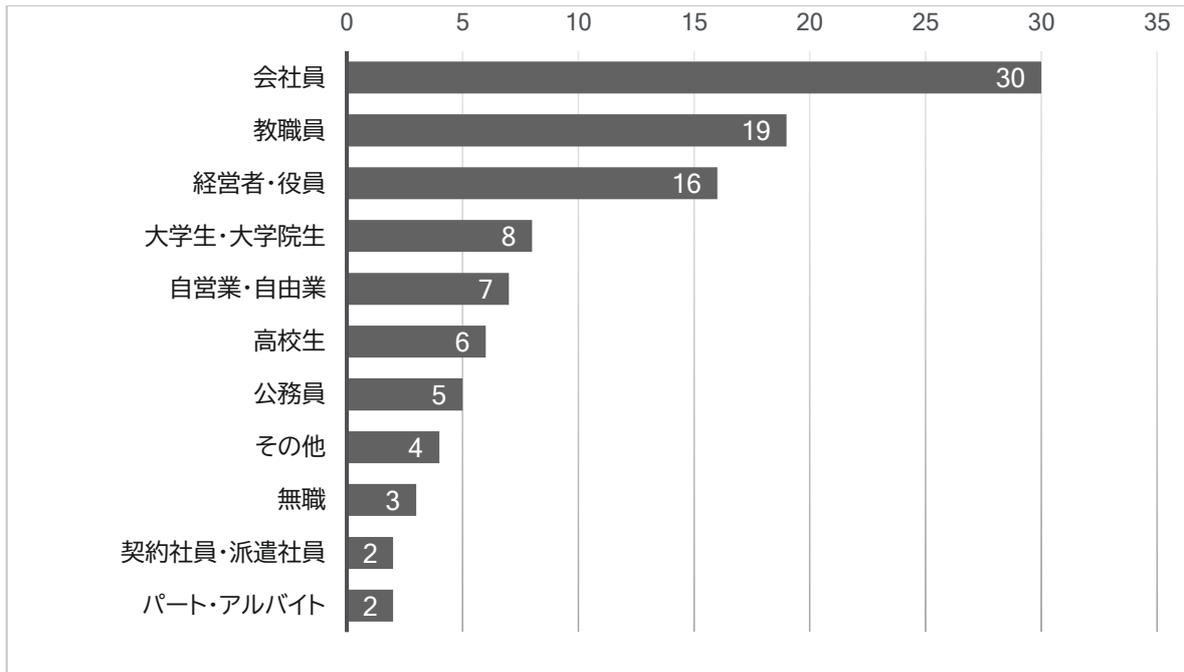
5. 年齢



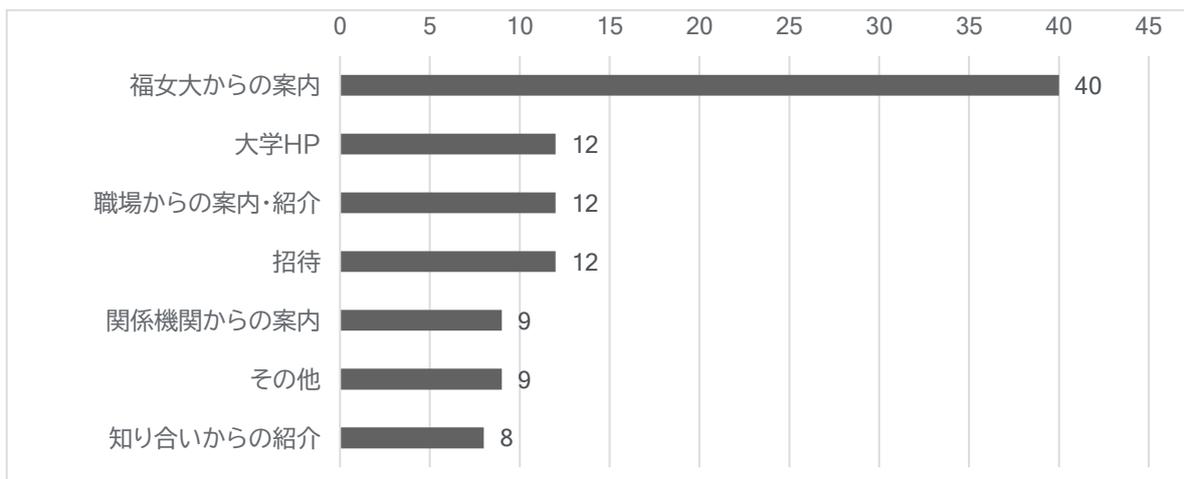
6. 居住地



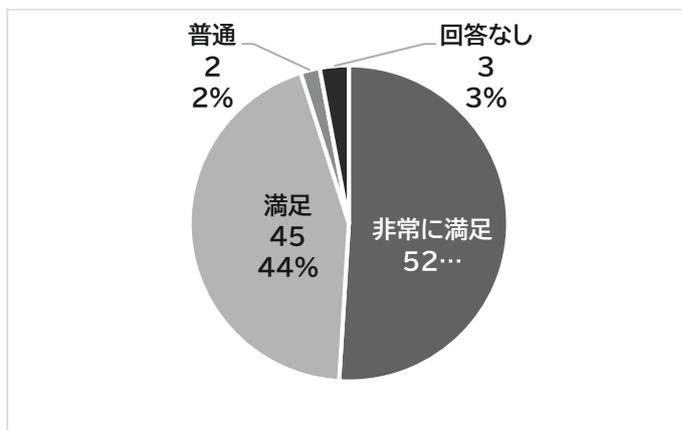
7. 職業



8. イベントを知ったきっかけ



9. シンポジウムに参加してどのように感じましたか？



10. 前問の回答理由

- ・ 女子大らしさ
- ・ 登壇者お一人お一人の話が素晴らしかった。
- ・ 登壇の方々のお話が素晴らしく勇気付けられました。
- ・ 前向きな気持ちにさせてもらいました
- ・ 刺激になるお話をいくつもいただけた
- ・ 講師のお話が良かった。
- ・ 女性のリーダーシップや思考の使い分けを学べたため
- ・ 新しい概念を知ることができたから
- ・ お一人おひとりの言葉が力強く、自分に響きました。ありがとうございました。
- ・ 講演内容が面白かった
- ・ 人を惹きつけるスピーチをされる方もいらっしゃったから。
- ・ 素晴らしい講座です
- ・ どの方のお話も大変参考になりました、また、Q & A セッションでのコメントも非常に参考になりました
- ・ 特にアジア開発銀行の田村さんの話が興味深かったです。思考、行動を止めないことの大切さを理解して今後仕事や生活に活かしていこうと思いました
- ・ 全ての話が刺激を受け、生き方の参考になった
- ・ 興味深い話をたくさん聞くことができた
- ・ 勉強になりました
- ・ 色々な視点で考えることができた。
- ・ 論壇者のセレクトが良かった。
- ・ 多様な登壇者の講演が聞けた。
- ・ 話に一貫性があるって伝えたいことは理解できました。できれば SDGs のような目標の提示だけではなく主体的なリーダーシップの成果をお聞きしたかったです。
- ・ The English interpretation provided is very much a help
- ・ 期待どおりのものだった。時間が延びるだろうなと予測していたけどその通りだった。しかしこのような話題について共に考える場があることは嬉しい。
- ・ 若宮和男さんのお話が今一番興味を持っている内容でした
- ・ 登壇者の方々のお話がどれも個性的で、大変勉強になりました。
- ・ 話の内容が、重複している事が多かったように思う。

- ・ 大変勉強になるお話がありました。津田塾大学高橋学長のお話は男性の私でも感銘を受けました。当社には優秀な女性社員が多くおりますが、その多くはリーダーを望んでおりません（会社ぜんたいでは全体ではなく私の周囲だけですが）彼女達を説得といいますか、理解頂く一つの解を頂いたような気がしております。また、若宮様のお話もいま私が抱えている課題について希望を頂いたような気がしております。
- ・ 新しい視点、気づきが得られました。
- ・ 女性の視点からのリーダーシップ論、キャリアデザインのお話を聞いた。特に、津田塾大学の高橋学長の「女子大学の存在意義」については、大変共感でき感動的でした。
- ・ 女子大の意義や柔軟な発想を改めて心に留め置くことができました。ありがとうございました。
- ・ さまざまな視点からの興味深い講演を聞くことができ、とても充実した。
- ・ 視点を変えることができた。特に質疑の内容が良かった。
- ・ 女性リーダーシップの将来に必要な視点、メッセージを体感できる貴重な機会となりましたため。良い企画をありがとうございました。
- ・ 女性リーダー育成研修からリベラルアーツについてインプットを続けているため。
- ・ I really enjoyed the symposium. I was very inspired by the female speakers. The interpretation function was effective in enabling me to follow the content of the symposium.
- ・ 登壇者の方のお話にとっても共感でき、そして学びを得る事ができました。これからのセンターの活動、期待しています。
- ・ それぞれ、とても興味深い内容でした。学長メッセージ、基調講演・ショートスピーチ、幅広いお話を聞くことができました。
- ・ 若宮氏の「正解のないものにどうやって慣れていくか」田村氏の「アンテナを高く考えていること」元村氏の「好奇心とチャレンジがいかに大切か」高橋学長の「なぜ女子大が存在するか？」のご回答。みなさんから考えるヒントや勇気をいただきました。
- ・ リーダーシップをキーワードに様々なお立場、ご経験に基づくお話をうかがえて、多面的理解に繋がりました。
- ・ ご登壇者のお話や「新しい時代を築く」という意気込みが伝わってくる場のセッティングなどとても素晴らしかったです。会場で参加して、ご来場者の方々との交流などもできたら良かったと感じ（自分の都合ですが）「満足」といたしました。
- ・ 基調講演が興味をひきました。ゲストスピーカーの話も聞き入りました。
- ・ 空間自体が素敵な場所でワクワクし、とても新鮮でした。シンポジウム自体も、様々な方のお話が聞けて、刺激を受けました。ありがとうございました。

- このような催し物を企画・運営できる大学としての確かな構えと教職員の力量を感じました。ありがとうございました。
- 女性の社会進出は必要です。その中で津田塾の学長のスピーチは大変良かったですね。
- 短い時間の中でたくさんの示唆ある話を聞くことが出来た。
- 「ないものを描いた」方々のお話を聞いて、福女大の一学生として残り2年間の大学生活をどう生きていこうか考えるきっかけになっただけでなく、これからの人生に良い影響を与えて下さる学び多きシンポジウムだったから。
- 登壇者がすばらしい。
- 会場の雰囲気もよかった。
- 女性として今後活躍していくために貴重なお話でした。また、自分も女子高校出身で女性で成り立つ組織に属していた経験があるので、その女性にフォーカスを当てられた組織の中での経験を今後活かすことが大切なんだなと思いました。
- 様々な立場の方からお話を伺うことができました。守破離はデザインアート思考にも大切であり、普段「守」に重きを置きすぎている自分がいると思いました。
- 普段出会えないような方々のお話を聞くことができ、また質問を通してコミュニケーションをとる機会を与えてもらったからです。
- 「自分なりの価値」をつくるため、他分の殻に埋もれず、どう価値、考えを築いていけばよいのかを聞くことができたから。
- 興味深いお話をたくさん聞けたけど、少し難しかった。
- 新しい視点での気づきを得られた。
- ここ数年の私の考え方・人生観と一致した。
- 普段生活しているだけでは知れない知識を入れることができたから。学生ではない、大人の方々の考え方は、私たちにはまだないものだと感じた。
- 今までジェンダー平等についてモヤっとした思いや考えに具体的な言葉を与えてもらった気がします。
- 魅力ある講演者の講義
- 登壇者のお話がよかった。質問もよかった。
- スピーカーの方々のお話
- 各界で活躍される方のお話を直に聴くことができました。また、女性リーダーが社会にまだ少ないことを改めて痛感。自分にできることは何か？という問いが生まれました。
- すべて非常に講演の内容がわかりやすかった。
- 各講演者のお話が良かった

- ・ 会社運営上参考になりました。
- ・ 内容は満足です。登壇者の方を生でみたかったです。（2F 席だったので）
- ・ 多様な考え方を知るきっかけとなりました。福岡女子大学の取り組みを知ることができた。
- ・ 今後の支えになる内容であった。又、ジェンダーのことを考えるきっかけとなった。
- ・ なかなかない機会でした
- ・ 女性の社会への参加を期待している
- ・ 様々な立場の方々の経験や考えに基づく信念が興味深かったです。
- ・ コロナ禍になり、しばらく対面の講演会などに参加していなかったのですが、今回図書館の中で様々な方面で活躍される方々のお話を聞くことができ、知識が広がった気分です。スピーカーの方々の話し方も落ち着いていて聞き取りやすかったです。
- ・ 見晴らしの良い、素敵な空間でのシンポジウム。とても有意義な時間でした。私の住んでいる福岡で、女性リーダー育成のセンターが設置されたこと、とても嬉しく思います。私もこちらで働きたい！！
- ・ 考え方が多方面に渡ってあって参考になった。
- ・ 社会で活躍中の先生方、各女性学長のお考えを（学生にも参加者にも）聞いて納得することが多かったです。
- ・ ないものの描き方がわかったからです。
- ・ 通常あまりふれることのない内容だったため
- ・ 世の中一般的な無駄な配慮のないお話ばかりで有意義でした。
- ・ 今の学生はステキなことを学べて楽しそうだ。社会は大きく進展している。年齢に関係なくワクワク感を感じるものだった。多様な人材を客員として迎えてあり、これからも学び続けたい、成長し続けたい、そのために動く力をもらったと思えるような。
- ・ 「アート思考」という自分起点で考えることが大切であるとわかっているようで忘れていた大切な思考を学ぶことができました。
- ・ 元村様のショートスピーチはとても心にひびきました。
- ・ 刺激になるキーワードを頂けた
- ・ 女性活躍、組織内のジェンダー平等についての重要性を改めて考える機会を頂きました。女性の可能性についての大切さも同様です。
- ・ 堅苦しさがなく、リラックスしてお話が聞けました。
- ・ kick off であってこれからは大事なので、満足しきらないように。
- ・ 若宮様 アート思考について自分が持ち得ていた感覚と違い新しい発見ができた
- ・ 皆さんの発言が理解しやすかった

- ・ 「自分起点」が参考になりました。
- ・ すばらしかったのですが、最後の最高顧問。それから高橋学長の質疑の方へのご提言はとっても鋭くよかったです。
- ・ 講演者がトップクラスでこのように集合することはないので。
- ・ 運営方法が大変参考になりました
- ・ 様々なバックグラウンドを持ったスピーカーの方々から多様な話を聞くことができ、リフレッシュできました。進行（終了時間）をマネージいただけると更に良かったです。
- ・ 自分が日々事業で行っている女性の応援を常に行っている。日本は女性をもっと活躍が必要であると常に思っていて実践しています。プライベート&ビジネスに関して信条は常に人と同じ事をしない事である。
- ・ とても学びになりました。特に若宮先生の講演は昭和生まれの私にとって非常に刺激を受けました。
- ・ 女性活躍についてとても学ぶべきことが多かったです。
- ・ いろいろな方のご意見をうかがえた
- ・ 周りの同年代と私生活において違うことが多く不安に思うこともありましたがこのままでいいんだと前向きな気持ちになれました。

11. 本日のシンポジウム（スピーチ等）で、一番印象に残っているものは何ですか。

- ・ 若宮さんのアート思考の話
- ・ 元村さんの今日の自分より明日の自分は成長していると信じている。
- ・ 元村さんのお話
- ・ もとむら先生のスピーチ
- ・ 女子大学のリーダーシップ育成
- ・ 高橋先生の質疑の回答
- ・ 他分について
- ・ ないものを描くために というテーマ自体。それを元にインプットができました
- ・ ないものを描く
- ・ 若宮さん
- ・ 津田塾大学長先生が、Q&Aセッションでおっしゃった“女子大”の意味が印象に残りました
- ・ アジア開発銀行 田村さんのショートスピーチが一番印象に残ってきます
- ・ 元村さんの、明日の自分は今日の自分より進んでいるという話が印象的でした
- ・ 田村由美子さん（アジア開発銀行 駐日代表代行）
- ・ 若宮さん、元村さんの講演

- ・ 高橋裕子先生の女子大は違う風景を見せている。
- ・ 自分起点で『ないものを描く』これからのリーダー
- ・ 正しさより歪さ
- ・ the keynote speaker
- ・ 福岡女子大女性学長について切り込んだこと、誰も言わないかと思ったので。
- ・ 正解のない時代、正しさより歪さ、価値の基準、軸を捉え直し、自分の中にある歪さの価値に気づくことの大切さ。
- ・ チャットにも書きましたが、最後の高橋先生のお言葉が印象に残りました。
- ・ 最後の質疑応答での高橋学長の「福岡女子大の学長が、女性ではないことは事件です」とのコメントです。学長等、上層部の役割を男性が務めていることに違和感を持っていない自分に愕然としました。女性活躍の必要性や重要性は理解しているつもりでしたが、自分の中に「そういう役職には男性が就くもの」との意識があったことに驚きました。そういうバイアスを自分が持っていることを自覚する機会になりました。目が覚めるような思いがしました。
- ・ 元村様のご講演は特に心に響くものがありました。目指したい状況を描くこと、チャンスは用意をしている人には振って沸くものなんだと 改めて思いました。
- ・ 津田塾の高橋学長の「女子大学の存在意義」について。そして、日本で最も歴史ある公立の女子大学に女性の学長が誕生していないことは、「事件である」と言われたこと。全く同感です。その状態になんとも思わない現状（自身の所属する女子大学も同様）を変革していきたい！と思います。
- ・ 女子大の意義を語られた高橋先生のお言葉に勇気をいただきました。
- ・ 質疑応答で津田塾大学の高橋学長が女子大学の意義について述べられたこと。
- ・ ないものから描く、造り出すということ。
- ・ 「ないものはあなたの中にある」という若宮さんのメッセージ
- ・ 若宮先生の先生の3つの思考法の違いと、使い分けが必要だというお話。
- ・ Yasuko SASAKI President, Ochanomizu University, National University Corporation, Yuko TAKAHASHI President, Tsuda University, Yumiko TAMURA Acting Representative, Asian Development Bank(ADB) Japanese Representative Office(JRO): I was inspired by their openness about the gender inequality in Japan, the struggles they had faced and their hope and aspirations to see change in the future. I really enjoyed listening to their speeches.

- ・ ショートスピーチのお二人の話が印象的でした。元村様の「一人で頑張らなくてよい」という言葉が響きました。
- ・ 若宮先生の講演
- ・ 若宮さんの「エンパワーではなくアンカバー」というお言葉、津田塾大学高橋学長の「人生のギアを入れる大学時代にどんなシャワーを浴びることが大事」というお言葉が印象に残っています。
- ・ 基調講演
- ・ 若宮さんの『ないものはあなたの中にある』という言葉が心に残りました。アート思考にヒントをいただきながら、自分にしかできない仕事を作り出せる自分に近づきたいと思いました。また、田村さんの「自分の問題意識の追求を常に行いながらも、行動する」という言葉も響きました。
- ・ ないものから何かを生み出すということは、難しいけれども今の時代に必要とされているのだなどご活躍されている女性リーダーの方々、若宮さんの公演、シンポジウム全体を通して確信しました。
- ・ 冒頭の貴学学長、お茶の水女子大学長、本学津田塾大学学長が同じ時間に揃われたことに、重要な意義と感銘を受けました。
- ・ 実務家のかたのスピーチはよかった
- ・ 津田塾の高橋学長の女子大の存在意義についての痛快な説明。
- ・ 自分の中に刺さるお話は山のようにあったが、1 番印象に残っているのは、最後の質疑応答の時間に津田塾大学の高橋学長の「福女大に女性学長が歴代に 1 人もいないのは事件である。現在もこの大学の重役が男性が占めているのは事件である。」というご指摘であった。
- ・ 女子大の意義として、「女性が力を発揮している風景を常に目の当たりにできること」があるのに、自分達の目の前で活躍しているのが男性であるのは「次代の女性リーダー育成」をビジョン達成の妨げになっていると言わざるを得ない。もちろん、男性職員が悪いなどと言っているわけではない。しかし、ロールモデルとして女性リーダーがこの大学を引っ張っている様子を学生達に見せてほしい。津田塾大学もお茶の水大学もスペルマン大学もみんな学長が女性だったので、福女大はその 3 大学に比べても引けを取っていると思った。この問題は、今後福女大が変革していくにあたり、とても重要かつ真剣に考えるべき課題であると思った。
- ・ キーワード：アート思考、コピーされないオリジナルなゾーン、ないものは自分の中にある、自分起点、自分自身の選択肢をふやす、どんな小さな一步でも社会を変えられる、明日の自分は今日より成長しているはず、今、理解できること・・・今の価値観。今は理解できないものに価値がある、思考と行動をとめない
- ・ 城石さんの話が印象的でした。自分は芸術を学んでおり、より一層“他と違う”ということが重要視されるので今日の話を実現のために最大限に活かしていきたいです。

- ・ 高橋先生がおっしゃっていた女子大についての可能性。女子大が存在する理由として、性別で役割を決められないから、私たち自身が自分を信じられることが挙げられると思う。
- ・ 女子大の存在意義について高橋学長の考えをきけたところです。
- ・ 自分の考えをどう言語化していくのか、また元村さんの「自分は自分」という言葉が印象に残り、用意の上、色々な人と関わるのが大切だと印象に残った。
- ・ 若宮さんのアート思考の講話
- ・ 価値の軸は自分自身の中にあるということ
- ・ 共通していた「自分は自分」ということ
- ・ "自分は自分"
- ・ アート思考について
- ・ 毎日新聞元村さん 仕事を断らない。
- ・ 津田塾大学高橋学長 経営陣等に女性登用必要
- ・ これまでやって来たことがまちがいでなかった
- ・ チャンスは外から降ってくる（毎日新聞 元村様）
- ・ 守・破・離”アート思考（若宮様）
- ・ 若宮さんのお話。自分の好き！とか興味が理由で発動する仕事を作っていくことがアート思考起因だという話。
- ・ 若宮さんの講演。女性主体+全員副業 Think artistic!
- ・ 若宮先生
- ・ アート思考
- ・ ジェンダー平等
- ・ 最後の質問コーナーでのお茶水女子大の学長先生の回答です。
- ・ 元村有希子さんのショートスピーチ
- ・ ひとつと選べない。
- ・ 津田塾の学長スピーチ
- ・ 理論的であり学術的で大変良いと思う。
- ・ 価値軸の軸は無数にある（若宮さん）自分は自分である（元村さん）プラス お茶の水高橋先生の Q&A の回答！
- ・ 若宮さんの基調講演の中で 3 つの施行を 1 つだけ選ぶのではなく、適宜使い分けたり組み合わせたりすることの重要性のお話が印象に残りました。
- ・ 元村さんのお話でアドバイス 3 つがわかり易く参考になった。置かれた場所で最善を尽くす、幸運がくるために準備する。毎日頑張ろうと思った。

- ・ 毎日新聞の元村様で「チャンスは外からやってくる」そのチャンスも用意していない人には現れない。「自分は自分である」感動しました。
- ・ 若宮さん、元村さんの講演
- ・ 女性の学長を1日も早く本学に実現できること
- ・ 箱ティッシュよりアートをつくりましようのところがおもしろかったです。
- ・ 若宮先生の講演（田村さん、元村さんの体験談 高橋学長のジケンです！も）
- ・ 若宮先生
- ・ 基調講演者：若宮氏 ないものを描く、特定の答えがない重要性
- ・ ロジカル（守）→デザイン（破）→アート（離）型は大事だが最終目的ではない。理想像はダイバーシティがある。元村氏トリセツを読みたい。
- ・ 自分起点の話が印象に残りました。女性の活躍の一つとして、今の若い女性にもっと知ってほしいと思いました。
- ・ 自分らしくあること Uncover yourself, keep the faith
- ・ 自分起点・偏愛・女子大の在り方 素晴らしい！！津田塾学長！！
- ・ 若宮さんの「価値の軸は無数にある」昭和世代の私は現在平成生まれの部下の対応で大切な考え方であると心に残りました。
- ・ 若宮氏のアート思考の話をもっと聞きたかったです。自分の固定概念を崩していく上でとても刺激を受けました。
- ・ アートシンキング
- ・ 各スピーカーすばらしかったです。最後までweb参加された津田塾高橋学長、インパクトありました。
- ・ 自分から出発すること
- ・ アート思考 元村さんのスピーチが良かった
- ・ ①「ないもの」はあなたの中にあるという言葉。②田村由美子氏の講演全体。③名誉学長「クロウトの女性をつくる」
- ・ 若宮様の基調講演。物事の考え方が良く整理されており参考にさせて頂きたいと存じます。
- ・ 若宮さんのアート思考。自分自身もそうですが部下の育成に活用したいと思います。
- ・ 男性の帽子を被っていた方の話（MR 若宮？）元村有希子さん
- ・ 基調講演
- ・ 若宮様のユニークに関する講演
- ・ アート思考について
- ・ 同じは悪で、違いは価値という言葉が1番印象に残りました。

12. 改善した方がよい点等がありましたらお聞かせください。

- ・ 素晴らしい企画でした。また次回を楽しみにしております。
- ・ 特にありませんが、設定の問題かもしれませんが、できれば開催 5 分前にはウェビナーに入室できるとよいと思います。なかなかつながらず、少し不安になりました。
- ・ 公立大学なので仕方ないのかも知れませんが、「あいさつ」が多すぎて、本当にお聞きしたい講演の時間が短く感じました。
- ・ 会場の風景などもスイッチングしながら良く運営頂き、リアルを超えたオンライン参加をさせて頂きました。運営なされた皆様のご苦勞に感謝します。
- ・ 学生は試験前で大学で勉強する姿が散見されました。折角の機会を逃して残念に思いますが、後日学内限定でも視聴機会があれば良いと思いました。
- ・ 個人的には、最後の方のご挨拶に少しドキッとしました。
- ・ 最後の締め言葉は時代がずれてる。
- ・ このシンポジウムは『「女性リーダーシップセンター」の発足にあたり、九州における「次代の女性リーダー育成拠点」としての役割や期待などについて、各界の女性トップリーダーのご意見をお伺いし、共有させて頂く、シンポジウム』という位置づけだと認識しておりましたが、シンポジウムの半分は「実際にはないものを描いた（主に女性の）大人の方のお話を聞く会」だったなと思います。その点が広報メール文ではあまり伝わってこなかったように思うので、同じような会が開かれる場合には会の内容をもう少し漏れなく明記した方が良いのかなと思いました。また、このシンポジウムは学生達こそ聞くべきお話ばかりだったように思います。実際どれくらいの学生が参加したかはわからないのですが、原則全員参加にして自分事にして考えてもらってもよかったのではないかなと思いました。
- ・ すばらしいスピーチと講演でした。また、質問なされた学生さんにも感心いたしました。若宮先生のスライド資料がいただければありがたいです。
- ・ 暑かったです。
- ・ 途中で立って体をほぐす時間が 30 秒でもあれば嬉しかったです。
- ・ 挨拶が多すぎて講演に入るまでに時間がかかり過ぎた
- ・ 組織の中ではもっと泥々しているので、そのような話を学生にしておくべきです。
- ・ 国内外女子大学長の方々のメッセージはもう少し踏み込んだお話を聞きたかったです。（難しいとは思いますが）
- ・ 空調が少し暑かった。（一般の 3F 席） 2F？
- ・ 担当の先生方、関係者の皆様、大変良い会でした。有難うございます。

- ・ 田村氏：具体的に自分は何をしたかをもう少し話していただいたらもっと良かった。そこをもっと聞きたかった。
- ・ 休憩をはさんでいただき良かったです。
- ・ 一方向の発信ではなく質問コーナーもあって良かった。
- ・ 参加者の男性比率（これから社会を動かす世代）を上げると良いと思います。まだまだ男性が社会を回しているなので学んでほしいです。
- ・ 質問がいろいろ出てよかったです。もう少しフロアとスピーカー、スピーカー間のやり取りができればいいよね。
- ・ 席の座り方がナチュラルで不自然かと思ったがおもしろかった。
- ・ 一対一で質問できる環境があったら嬉しいです。

13. その他コメント等ございましたらご記入ください。

- ・ このような機会をくださり、誠にありがとうございました！
- ・ 参加してよかったです。ありがとうございました。
- ・ 登壇された方すべてのお話が興味深く、気付きがあるものでした。あっという間の2時間でした
- ・ 高橋 裕子さん（津田塾大学 学長）の最後の提言（福岡女子大の上層部が男性ばかりである事）について、女子大の見解が知りたかった。
- ・ どんな方々が参加されているのか知りたかった。
- ・ 豊貞先生、大役、期待してます。
- ・ It is appreciated if you can provide participant with e-certificate of attendance that will contribute to our KPI
- ・ オンライン参加ではあったがいくつかのカメラが設置されていて会場の雰囲気を感じられた。
- ・ ウェビナーで参加できたので、貴重なお話を聞くことができました。ありがとうございました。
- ・ このような場を設けてくださり、ありがとうございます。オンラインでも参加できるというのは、特に週末はありがたいです。今回、本学の学生たちも多く参加し、何らかの感銘を受けてくれていることを願います。
- ・ 勇気、やる気を持って前へ進もうと 明るい気持ちになれました。またこのようなご講演があれば是非参加させて頂きたいです。
- ・ 素晴らしいパネリストのお話を聞いて、刺激を受けました。ありがとうございました。
- ・ Webでの参加は大変ありがたくございます。ご多用の中、開催くださり感謝申し上げます。
- ・ 図書館・美術館という空間がユニークで（堅苦しくなく殺風景でもなく）よかったです。イベントのテーマにもあっていると感じました。

- ・ メインテーマではありませんが、津田塾高橋学長の最後のコメントはとても重要な示唆を含んでいたと思います。女性リーダーシップセンターの事業が展開されるその先に、大学トップの風景が変わる、そんなことも考えさせられる機会でした。今後にとっても期待しています。
- ・ I really enjoyed today and I was very grateful for the translation service available. I would be very interested in participating in future events by the women's leadership centre.
- ・ 期待と希望を含み意見を言わせていただくと、最後の顧問のお話は、若い方達が明日の、未来の姿に夢を抱けるようなお話で締めくくっていただき良かったです。
- ・ 女性リーダーシップセンターの発足、お祝い申し上げます。
- ・ 本日は有意義なシンポジウムに参加させていただき、誠に有難うございました。今後の福岡女子大学の繁栄を心よりお祈りしております。
- ・ 複数のカメラで会場を捉えていただき、オンラインでも違和感なく参加することができました。世のたくさんの女性に聴いていただきたい素晴らしい内容でした。ありがとうございました。
- ・ リカレントが女性リーダーシップセンターに紐づいているのが素晴らしい！！
- ・ 今後も、様々なジェンダーギャップを、設置者の垣根を払った同じ女子大学から共に変革していく機会・活動が持てればと思います。今後も貴学から学ばせていただければ幸いです。
- ・ 県立大学なんです、そろそろ真剣に共学を自ら検討すべし
- ・ 今回のお話を聞いて、重大な変革期を迎えている福女大に所属できていることを改めて、誇りに思いました。貴重な機会をありがとうございました。今自分には何ができるか追及し続けていこうと思います。
- ・ 大変よい、刺激をいただきました。卒業生として今後も関わることがあると嬉しいです。
- ・ 貴重なお話ありがとうございました。
- ・ 女子大の可能性・女性自身の可能性について考えられました。アートが女子大にとりいれられる意味があまりわかっていなかったのですが、「よくわからないものに触れる」自分の処理不可能なものに出会えることに価値があると思いました。
- ・ 準備・運営などに関わってくださった方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。
- ・ とてもおもしろかったです。
- ・ 今後 福女のリーダーシップセンターの理念が叶いますよう祈念します。
- ・ とても有意義な時間でした。これからも、何らかの形で関わり続けられればと思います。
- ・ 大学の100年の教育は素晴らしいと思いますが、社会の変化スピードに追いついていない気がします。あるいは大学の卒業生の数が少ないのか。。この20年の日本経済の衰退と共に女性は家庭から社会で働き、低賃金の労働を担わされ、家庭での労働と併せて疲弊していく人

も多いです。もっと直接的に町議・市議・県議・国会議員に女性になれる道を拓く、また法曹界への道を拓くような早く社会を変える道を考えていって欲しいです。

- ・ このような会（講演会）をもっと開催してほしい
- ・ 女性リーダーが活躍するための環境、考え方を整えて必要があるなと思いました。
- ・ 図書館での講演会というのはあまりない試みでとてもよかったです。時間は守ってほしいです。
- ・ ありがとうございます。アート思考について興味があり参加しました。
- ・ 対外的に広く広報されたほうが良いと思いました。多くの方にとって価値の高いシンポジウムだったと存じます。今後も継続してこのような機会があればよいと思う。また、ボランティアとして、会の開催運営に携わりたい。そのような機会があれば嬉しいと思います。
- ・ 期待しております。
- ・ 若い方々に向けたシンポジウムなのかな、場違いなのかなと思っていたところがありましたが、人生の終盤に差しかかった自分にも心に響くメッセージを受け取り、わざわざ参加した甲斐がありました。ありがとうございます。少し物足りなかったのは、日本の女性活躍の評価が低いこと 121 位/158 国を改善する具体策を聞きたかったです。
- ・ とても良い雰囲気の中で良い体験ができました。来てよかったです。ありがとうございます。
- ・ 女性の活躍の場が少ない現況の中、本日のスピーチされた皆さんは皆女性。とてもうれしく勇気を頂けた。これから将来もっと女性のポジションがよくなるといいですネ。
- ・ 面白いシンポジウムでした。ありがとうございます。
- ・ 同窓生として、女子大の目ざすもの コンセプトを知りたく参加いたしました。友人・知人に広めたいと思います。
- ・ 学生さんの質問の姿勢が印象に残りました。
- ・ 今後の女性リーダーシップセンターに大変期待いたします。
- ・ 進み続ける大学。大学は何を目指しているか？クローゼットがおもしろかったし、そうあってほしいと思った。学生の質問・感想が良かった。乱筆、乱文おゆるし下さい。
- ・ 本日はご招待ありがとうございました。貴重な時間を頂けたことに感謝致します。
- ・ 学問研究としての LSC、人材育成の場としての LSC、興味あります。
- ・ OB として誇らしく思った。（OG！）
- ・ 勉強になりました。全国でも知名度をアップさせてください。
- ・ このような機会がまたありますことを願っています。
- ・ 地元である鹿児島で個人経営がしたく今福岡で勉強のためにアルバイトをしています。参加して、自分はどういう人間なのか、どういう経営をすれば、自分自身も心豊かに余裕を持って、生きられるかということを深く考えるきっかけになり、福岡に来たばかりですが、方向性が見えてき

て、今何を取り組めばいいのか分かってきて、これからが楽しみになりました。周りの同世代と違うことが多く、たまに不安になって辛くなることもありますが、今好きな仕事をしていて、楽しいことの方が多いので、これからどの選択をしても自分らしく頑張っていこうという気持ちになりました。参加して本当によかったです。ありがとうございました。

シンポジウムフライヤー（日本語・表面）

福岡女子大学 女性リーダーシップセンター キックオフシンポジウム

2022.5.28(土) 15:00-17:00 参加費無料
日英同時通訳付 (オンラインのみ)

要事前申込/会場参加 定員先着 100名様 または オンライン参加 Zoom ヴェビナー

「ないものを描くために」

15:00 シンポジウム 会場: 福岡女子大学 附属図書館/美術館

オープニング

向井 剛 福岡女子大学 理事長・学長

豊貞 佳奈子 女性リーダーシップセンター長
学長補佐・国際文理学部環境科学科 教授

設立者代表挨拶

大曲 昭恵 福岡県副知事

国内外女子大学長からのメッセージ

佐々木 泰子 国立大学法人 お茶の水女子大学 学長

高橋 裕子 津田塾大学 学長

メアリー・シュミット・キャンベル スベルマン大学 (米国) 学長

基調講演

「自分起点で『ないものを描く』これからのリーダー」

若宮 和男 起業家・アート思考キュレーター・福岡女子大学 客員教授

ショートスピーチ

田村 由美子 アジア開発銀行 駐日代表代行

元村 有希子 毎日新聞論説副委員長・福岡女子大学 客員教授

質疑応答

クロージング

梶山 千里 福岡女子大学 最高顧問

17:00 終了

「女性にも高等教育を！」
100年前、ないものを描き出し、立ち上がった女性たちが、ここ福岡にいました。彼女たちは、当時の県知事や市長に働きかけるなど、草の根運動を展開し、福岡女子大学の前身となる全国初の公立女子専門学校の設立にこぎつけます。
そして、創立100周年を迎える今、その「福女大スピリット」に根差し、本年4月に女性リーダーシップセンターが設立されました。将来予測が困難で、不確実、複雑な時代にあつて、よりよい社会を創り出していくためには、福岡女子大学の起源となる「ないものを描く」力が求められています。
本シンポジウムでは、九州の「次代の女性リーダー」育成の拠点としての女性リーダーシップセンターを耕し、育てていくための多様なアイデアを交換します。

100 100年を拓くまで
2004-2023 FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY



公立大学法人
福岡女子大学

主催/福岡女子大学 女性リーダーシップセンター



シンポジウムフライヤー（日本語・裏面）

福岡女子大学

女性リーダーシップセンター

キックオフシンポジウム 2022.5.28(土)

基調講演「自分起点で『ないものを描く』これからのリーダー」



若宮 和男

起業者・アート思考キュレーター・福岡女子大学 客員教授
建築士としてキャリアをスタート後、東京大学にてアート研究者となる。NTTドコモ、DeNAにて複数の新規事業を立ち上げ、2017年un'ique創業、2018「すこしベンチャー100」選出。新規事業、アート思考、ダイバーシティ、コミュニティ関連でメディア掲載、講演など多数。著書に『ハウ・トゥー・アート・シンキング』『アート思考ドリル』。

ショートスピーチ



田村 由美子

アジア開発銀行 駐日代表代行
青山学院大学大学院国際経済学修士課程修了。1998年、アジア開発銀行(ADB) 入行。ADBの総務補佐官、東南アジア局・東アジア局の局長室勤務を経て、2022年より現職。ベトナムに7年、ミャンマーに3年駐在し、特にメコン川流域諸国の専門家として個別女屋戦略の策定と実施、地域協力・統合、ドナー調整など、幅広い業務をリードしてきた。



元村 有希子

毎日新聞社編集委員・福岡女子大学 客員教授
福岡県北九州市生まれ。1989年、九州大学教育学部卒業、毎日新聞入社。西部本社報道部、福岡総局などを経て2001年、東京本社科学環境部。日本の科学技術と社会との関係をつづった連載『理系白書』により06年の第1回科学ジャーナリスト大賞を受賞、科学環境部デスク、同部長などを経て2021年4月から編集副委員長。近著『科学のトリセツ』。

国内外女子大学長からのメッセージ



佐々木 泰子
国立大学法人
お茶の水女子大学 学長



高橋 裕子
津田塾大学 学長



メアリー・シュミット・
キャンベル
スベルマン大学 (米国) 学長

参加申込・お問合せ

申込フォーム、または FAX で参加申込を承ります。

申込フォーム

<https://forms.gle/VnFQ3GYwFuus9Aoy9>

申込締切日…5月20日 [金]



- *会場参加は定員100名様となります。定員に達し次第、受付を終了させていただきます。
- *オンライン参加 (Zoom ウェビナー) につきましては、ライセンスの購入上限を超えた時点で受付を終了させていただきます。
- オンライン参加ご希望の方には参加用 URL と詳細をお送りします。

【お問合せ】 TEL…092-692-3198 E-mail…wlc-info@fwu.ac.jp

*新型コロナウイルスの感染状況により、全面オンラインとさせていただく場合がございます。

FAX申込票

FAX…092-692-3220

会場参加の方は FAX でもお申し込みいただけます。

FAX でのお申し込みの際は下記フォームをご利用ください。

お名前	携帯番号	FAX
ご住所 〒		
所属		
中込理由 (複数回答可)	<input type="checkbox"/> スピーカーに興味があったから <input type="checkbox"/> リーダーシップに関心があったから <input type="checkbox"/> 福岡女子大学に興味があったから <input type="checkbox"/> 職場などから紹介されたから <input type="checkbox"/> 研修の一環として参加するため <input type="checkbox"/> その他 ()	
<input type="checkbox"/> 女性リーダーシップセンターに興味があったから <input type="checkbox"/> シンポジウムのテーマに興味があったから <input type="checkbox"/> 該当する項目にチェック <input checked="" type="checkbox"/> をお願いします。		

福岡女子大学

誕生的一幕(歴史)

福岡女子大学は、昭和25年(1950年)、戦後の激動の時代に誕生(公立女子専門学校から4年制大学に昇格)しました。

大学昇格には、資金集めや国・県の承認等様々な困難がありました。特に、文部省や県からの短期大学移行への強い要請により、公立女専の多くが短期大学へと移行する中、当時の情勢では本学もその例外ではありませんでした。しかし、新制大学としての水準を満たすことはもちろん、学校・同窓会・学生・地域が一丸となった、熱意ある昇格運動がこれを覆し、大学への昇格が実現しました。

福岡女子大学が今も存続し続けることができる理由のひとつとして、こうした歴史があります。



開校の校門にて(女専第26回アルバムより)



シンポジウムは福岡女子大学 附属図書館/美術館内で開催します。図書館の建築はグッドデザイン賞を受賞(2015)。片山博嗣氏、田代雄一氏の彫刻をはじめ、アート作品に囲まれた開放的な空間です。

会場

福岡女子大学 附属図書館/美術館

〒813-8629 福岡市東区善住ヶ丘 1-1-1

バス……西鉄バス(天神中央郵便局前)バス停から21A又は26Aで約15分、[福岡女子大前]バス停下車 徒歩約1分

西鉄電車……[博多花園駅前]から徒歩約10分、[博多駅]から徒歩約12分

JR……[博多駅]から徒歩約15分

シンポジウムフライヤー（英語・表面）

**Fukuoka Women's University
Women's Leadership Center Inaugural Symposium**

*Imagining
What Is Not Yet*

May 28 2022 3pm-5pm (JST)

At FWU Library / Museum of Art & Online
FREE WITH RSVP



Opening Remarks

Tsuyoshi MUKAI

Board Chairperson and President, Fukuoka Women's University

Kanako TOYOSADA

Director, Women's Leadership Center /
Advisor to the President, Fukuoka Women's University /
Professor, International College of Arts and Sciences

**Greetings from the Prefectural
Government of Fukuoka***

Akie OMAGARI Vice Governor, Fukuoka Prefecture

Greetings from Women's Universities

Yasuko SASAKI

President, Ochanomizu University, National University Corporation

Yuko TAKAHASHI

President, Tsuda University

Mary SCHMIDT CAMPBELL

President, Spelman College, USA

Keynote Address

Kazuo WAKAMIYA

unique Founder / Art Thinking Curator /
Visiting Professor, Fukuoka Women's University

Addresses

Yumiko TAMURA

Acting Representative, Asian Development Bank (ADB)
Japanese Representative Office (JRO)

Yukiko MOTOMURA

Deputy Chief, Editorial Board, The Mainichi Newspapers /
Visiting Professor, Fukuoka Women's University

Discussion

Closing Remarks

Tisato KAJIYAMA

Chief University Adviser, Fukuoka Women's University

"We want higher learning opportunities!!"

Imagining what was not yet available to them, women in Fukuoka started their education movement 100 years ago. They yearned for and demanded access to higher education, which was then regarded as unnecessary for women. Among many who echoed the women's aspiration and plea, the Governor of the Prefecture of Fukuoka, as well as the Mayor of the City of Fukuoka, took actions that resulted in the establishment of the very first local public women's college (*joshi semmon gakko*) in Japan, which became Fukuoka Women's University (FWU) in 1950.

As we celebrate the 100 years of education rooted in the spirit of women who have imagined and worked tirelessly to create "what is not yet", we are proud to announce the opening of our Women's Leadership Center (WLC). In these times of VUCA (volatility, uncertainty, complexity and ambiguity), the power of imagination—looking beyond the given, beyond what appears to be unchangeable—is of utmost importance in working toward the realization of well-being for all. Here at the FWU-WLC, we value such power of imagination as we engage in education and research.

We heartily welcome you to join our endeavor to serve as the regional hub for developing women leaders and to this opportunity of exchanging ideas. Let us all imagine what is not yet.



**FUKUOKA WOMEN'S
UNIVERSITY**

*FWU is a public university corporation established by the Prefectural Government of Fukuoka.

シンポジウムフライヤー（英語・裏面）

About the Speakers

Keynote Address

"Unleashing the 'Self' to Lead,
to Imagine What Is Not Yet"

Kazuo WAKAMIYA

uni'que Founder / Art Thinking Curator /
Visiting Professor, Fukuoka Women's University

Having worked for an architecture firm, Mr. Wakamiya went on to study aesthetics at the Faculty of Letters at the University of Tokyo, to further explore art at the Graduate School of Humanities and Sociology. While at NTT DoCoMo, then at DeNA, he spearheaded a number of new projects, and in 2017 founded his own company "uni' que", to be awarded "The 2018 Sugoi Venture (the "wow" start-ups) 100". He has written and spoken extensively on start-ups, art-thinking, diversity and communities. He is the author of "Hau Tu Art-Thinking (hows on arthinking)" and "Art Shikou Doriru (drills on art-thinking)".

Addresses



Yumiko TAMURA

Acting Representative, Asian Development Bank (ADB) Japanese
Representative Office (JRO)
MA in International Economics, Aoyama Gakuin University

Since joining ADB in 1998, her career largely focused on the Mekong countries including 7 years in Viet Nam and 3 years in Myanmar where she led the preparation and implementation of the country partnership strategy, in-country regional cooperation and integration activities, and other development assistance initiatives. As an advisor to the General's, she was involved in ADB-wide strategic matters while in Director General's offices for Southeast Asia and East Asia, she was responsible for all resources management, knowledge creation and sharing, and OneADB activities.



Yukiko MOTOMURA

Deputy Chief, Editorial Board, The Mainichi Newspapers /
Visiting Professor, Fukuoka Women's University

Born in Kitakyushu, Fukuoka, Ms. Motomura studied psychology and communication at Kyushu University, and started her journalist career at the Mainichi Newspapers' Kyushu Head Office. Winner of the 2006 Science Journalist Awards (JASTJ Awards), she has been renowned for her work in science communication to the public. Her most recent work is "Kagaku No Torisetsu (how to approach science)", a full-of-wit, easy-to-read essay on everyday science. Her personal account as a cancer survivor has touched many of those in suffering.

Greetings from Women's Universities



Yasuko SASAKI
President, Ochanomizu University,
National University Corporation



Yuko TAKAHASHI
President, Tsuda University



Mary SCHMIDT CAMPBELL
President,
Spelman College, USA

Our History

There were enormous challenges in becoming a university, including fund-raising and licensing procedures. Both the Ministry of Education and the Prefectural Government of Fukuoka initially backed the idea of creating a two-year junior college rather than a four-year university. Nevertheless, the teaching faculty, alumnae, students, and the local community imagined in chorus and worked for what was not yet, resulting in the status being raised to a four-year university. Had it not been for their imagination and work, we would not have become what we are.



Photo: The 1950 Jastu Semmongekoku Yearbook



Hiroshi KATAYAMA



Yuichi TASHIRO

The venue is on the first floor of our library-museum, highly renowned for its design ("The Good Design Award, 2015"). Enjoy the bright and open atmosphere surrounded by unique pieces of artwork, including the sculpture works by Yuichi TASHIRO and Hiroshi KATAYAMA.

Open to the general public and FWU community
both in-person (limited to 100) and online.

Register online by May 20 at:

[https://forms.gle/
VnFQ3GYwFuus9Aoy9](https://forms.gle/VnFQ3GYwFuus9Aoy9)



Online participants will receive the Zoom link by
May 26. Might be held online only due to the
COVID concerns (TBA by May 26).

Fukuoka Women's University Library / Museum of Art
1-1-1 Kasumigaoka, Higashi-ku, Fukuoka 〒813-8529

編集・発行：福岡女子大学女性リーダーシップセンター

発行日：2022年9月15日

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘 1-1-1

TEL : 092-692-3198 (直通) EMAIL: wlc-info@fwu.ac.jp

WEB: <http://wb2.fwu.ac.jp/leadership/>